

唱歌の初の方の「カアカカカスガ」といふところまでのリズムとか、「出た〜月が」といふ唱歌の「タタタタ」のところのやうなリズムがそれでありませう。

これは、歌はうとする子供の氣持が、真先に、勢こめたエネルギーとしてつき出されて高い音となり、それからその氣持と、エネルギーと息とが一時衰へて、低い音となり、しばらく休んだ形となつた上で、再びそのエネルギーや氣持や息が、甦へつて来て、高い音となるといふ、子供の生命活動そのもの、自然のリズムと關係するものでありますから、自然その生命のリズムに適つた、高い低い、強い弱いといふ順序のリズムの歌の方が、子供にとつて、最も親しみ易く、又歌ひ易いといふのであります。

歌のリズムから運動のリズムへ 幼兒が歌を歌ふ時、首を振つたり、手を叩いたり、足踏みをしたりして、何時の間にか、歌のリズムに合せた、手拍子足拍子をとつて歌つてゐることを、しばしば見受けることがあります。かういふことは、自分で歌ふのではなく、人の歌ふのを聞いてゐるだけの時でも、時々やることがあります。

これは、音を聞くにつれ、或は歌ふにつれて、幼兒の心の中に、たゞよひ始めたところのリズム感情が、幼兒の全體の心に波打たせて、その波の動きを運動を司る方の心の部分にまで押し及ぼした、めに起つた事柄でありまして、殊に、見るとか、聞くとか、動くとかいふ、いろいろの心の動きが、まだはつきりとその働き方を分けてゐないところの、漠然とした幼兒の心には、よくあり勝なことであります。

即ち、リズム感情を呼起すやうな音を聞いたために、幼兒の心の中に振り起されたリズム感情が、たちまちその子供の心の全體の動き方を、そのリズムに合せるやうに動かす始め、その結果、その全體の心の動きと離れることの出来ない關係にある、手や足まで、いつしよになつて、そのリズムの通りに動き出したものであります。

これを手近かな例にたとへて申しますと、こゝに一本の小さな松の木があるといひませう。今誰かその木の下枝に手を觸れて、かすかにこれを動かしたとして御覽なさい。さうすると、その下枝につらなる幹が、かすかに震へるでございませう。幹が震へ出したら



今度は、その幹につらなつてゐる他の上枝までが、皆かすかに震へずに居られないであら  
ませう。丁度心の枝にもたとへるべき、聞くといふ動きからしてリズムを傳へられたため  
に、その幹にあたる心の大本が震へ出し、その幹が動いたためは、同時にその上枝にも  
たとへべき手が動き出したといふやうに考へましたならば、これらの関係が餘程はつきり  
して來るかと思ひます。

かやうな關係で、歌を聞いた時に起るリズム感情が、手足の運動を起しますと、今  
度はその逆に、手足の運動のリズムが、心の中にリズム感情を呼起し、その結果、歌と運  
動との二つのリズムから來る、一層強いリズム感情を心の中に呼起して、幼兒の快感はま  
す／＼高められて行くのであります。

かやうな、手拍子、足拍子のやうな運動は、歌を聞いた時だけとは限らず、何か嬉しい  
ことが子供の心の中に起るさへすれば、すぐにそれをこの律動的な運動の形で外に表すも  
のであるといふことは、いろいろの場合で觀察されます。

例へば、冬しおきで、郊外散歩につれ出された時など、嬉しくて／＼たまらない氣持を  
表すために、子供はよく、親の手もとをすく抜けて先走りしては、片方の足を、二度づつ、  
續けざまに踏んで、次に他方の片足を又二度づつ、踏み續け、それを代る／＼やつては、  
嬉し／＼に脚を打つて行く姿を、われ／＼はしば／＼見せられることがあります。子供はか  
うして自分の嬉しい氣持を、足の運動のリズムとして表し、更にそのリズム運動によつて  
呼び起されるリズム感情を、一層強く經驗しては、ますます嬉しくなつて行くのであります。

幼兒の脚 此の運動のリズムを樂しむところの子供の動作が、とりもなほさず、子供の自  
然の踊であり、ダンスであります。従つて若し木本の者からして、子供の運動の自然のリ  
ズムを無視して作つたやうな律動遊戲を、子供に強いるやうなことがあれば、子供の美感の  
發達を促すどころではなく、かへつて苦痛と嫌惡とを與へて、麗しい美感の發達を妨げる  
ことさへ現れるに至るであらませう。人の脚を踏む、足を踏む、そのなりやうなものは、



例へば、比較的活動性の乏しい老人の間に多く好まれさうな、あのゆつくりとした拍子で、静かに舞ふところのお能のリズムを、活動性に富んだ幼な兒のダンスの中にとり入れたとして御覧なさい。修養とか、訓練とかいふ目的のためにやるのならいざ知らず、いやしくも、幼兒の自然の要求、なかんづく、美的感情の自然の育成のためにやる踊であるならば、かやうなゆつくりしたリズムは、幼兒にとつて、むしろ苦痛であるかも知れませんが。

さうかといつて、南洋の土人の尻振りダンスのやうな、極端に急速な運動をしなければならぬやうなリズムも亦幼兒にとつては無理でありませう。

そんな極端な例を引くまでもなく、子供等の生活の中に、時々見受けられるところの、それに類した例を拾つてみるならば、運動會などで、全校の兒童が、樂隊の音に合わせて行進するやうな時、若しその樂隊の音が、大きな子供の方の歩行運動のリズムに最もよく適つたやうな速力で奏でられると、その時いつしよについて歩いてゐる小さな子供等は、可

哀さうな程努力しながら、その不自然な速度に、自分の歩行運動を合せようとしてあせつて居ることを、しばしば見受けるであります。かういふ時、誰でも、その樂隊のリズムがその小さな子供らにとつて不自然であるといふ事に氣がつくことが出来ます。

これらの例から考へても解りますやうに、單に速さといふ點だけからみても、幼兒の運動の自然のリズムといふものが、その年齢に応じてそれ／＼速いものであることを知り得る以上、われ／＼は幼兒の美感を、自然の間に育んで行くところの、踊りといふものを、如何なるリズムの下で行はせるのが一番よろしいのかといふ問題について、一般の研究と工夫とを積みなければならぬものであることを痛感させられます。



## 第九講 幼児の情緒と本能

### 一 臆病な子供の原因と矯正法

臆病の原因 幼児は、一方において、お話を聞いたり、繪を描いたり、歌を歌ったり、賑を踊つたりして喜ぶところの、臆しい純な美的感情をもつてゐると同時に、他方では、怒つたり、怖がつたり、悲しんだりするところの激しい情緒といふ感情をもつてゐて、時には、その情緒を行ひに表して、嘔吐したり、逃げ廻つたり、泣き叫んだりするといふやうなことは、幼児の日常生活においても、しばしば見るところであります。

かやうな喜怒哀樂等の激しい感情即ち情緒が、外面に現れて、いろいろの行動を起す時に、これを本能活動といつて居りますが、この本能は、前にも述べましたやうに、人間の生命を保つて行くためには、なくてはならぬ、大切な生れながらの備さであります。

かやうな本能は、幼児の時代に最も強く現れるものであります。その意味で、幼児期は、本能全盛時代ともいふべく、いろいろの本能が、次から次へと、力強く目覚めて来る時代であります。

これらの諸々の本能の内、最も根本的なものは、怖がりの本能と、怒りの本能と、愛の本能との三種類であるといはれて居ります。

その内の怖がりの本能については、すでに乳児の本能のところでも、簡単に述べておきました。この本能が、極端に強く現れると、いはゆる臆病といふものになつてしまひます。

臆病の原因については、いろいろ云はれてゐるやうですが、しかしその大部分は生れてから後に、家庭で養育のけられたものであります。多くの幼児に見られるところの、暗いところを怖がるといふ臆病の如きは、確かに、家庭で教へ込んだものであります。

大事な事、この点について、アメリカの児童心理学者タフトマンが、興味ある實驗をし



て居ります。若し、暗いところを怖がるといふことが、生れながらのものだとすれば、まだ何も教へられてゐない赤ちやんが、暗いところへつれて行かれた時、怖いといふ態度を示さなければならぬはずであります。

ところが、實際澤山の赤ちやんを、暗いところへつれて行つてみたのですけれども、どの見も決して怖がりも、泣きもしなかつたのであります。これで、暗いところを怖がるといふことは、決して生れながらのものではないといふことが判つたのであります。

次に明るいところで、赤ちやんの後の方から、突然、ガーンといふ大きな音を出してやると、どの見も皆びつくりして泣き出します。これで、突然起る大きな音といふものは、どんな子供に對しても、生れながらに、その恐怖心を起させるところの原因となるものであることが判るであります。

今度は、又暗いところへつれて行つて、そこで突然ガーンといふ大きな音を立て、みました。すると赤ちやんは、その大きな音を聞いて、びつくりして泣き出します。かういふ

實際を數度繰返して、何時でも、暗いところで、大きな音を聞いては、恐怖心を起させるといふ状態において居りましたところ、おしまひには、大きな音を聞かせなくとも、暗いところへつれて行きさへすれば、すぐ怖がつて泣き出すといふことなつてしまひました。

この實際で明かに示されて居りますやうに、暗いところを怖がるといふ子供の心は、どんな子供でも必ず怖がるところの、大きな音を聞かされるといふ原因のために、すでにその心が恐怖心で一杯になつて居ります時に、たま／＼目の前に暗いところが見えたので、その暗いといふこと、怖いといふことが、結びついて、今度は逆に、暗いところを見させれば、すぐ怖いといふ氣持が、呼び起されるといふ風に、習慣的に作り上げられたものであります。

同じ理窟で、どんな子供でも、生れながらにして必ず怖がるところの大きな音を立て、先づその子供の心を恐怖心で充たしておいて、それから、その子の目の前へ何か持つて行つて見せると、今度は、その物を見ただけで、すぐ恐怖心を起すといふことになるのであ



此の實驗の一例として、ワットソンが、赤ちやんに、鬼を見せて怖がらせるやうにした順序を説明いたします。また鬼を見たことのない、生後九ヶ月の赤ちやんの側は、鬼をつれも行つて見せましたところ、その赤ちやんは、珍しうに、お手々をさし延べて、その鬼を撫で馴しては喜んでおるのであります。鬼の代りに、夫をつれて行つても土猫をうれで行つても、やはり同じことを決して赤ちやんは、かういふ歌を怖がるといふことを、生れながらにして與へられて居るものでは無いといふことが、これで明らかたされたのであります。此の歌は、

ととて、赤ちやんが、その鬼を、<sup>お</sup>ととして撫で馴して居る真最中、突然その後の方で「ワトソン」といふ大きな音を立てたのです。勿論、その赤ちやんは、びつくりして泣き出しました。かういふことを、二三度繰返して居る間に、今度は、大きな音を立てなくとも、その鬼を見せれば、すぐ怖がつて泣き出すやうになつてしまつたのであります。即ち鬼

を怖がるのは、生れながらの子供の心ではなからず、生れながら後には種々つけられたところの恐怖心であるといふことが證明されたわけでもあります。この歌は、

かうして、<sup>たん</sup>目蓋を怖がる心を種々つけられた子供は、今度は、鬼だけに止まらず、それ以外のもの、<sup>りい</sup>歌といふ歌も怖がるやうになつて行くのでなく、おしよひには、毛で作つた品物までも怖がるやうになつてしまひます。ワットソンは、かうして恐怖心を種々つけられた子供が、<sup>りい</sup>ひに毛のショールを見て泣き出すやうになつた實驗例をあげて居ります。

この世間には、よく、夫や猫などの歌を、非常に怖がる子供がおりますが、これはやはり、かうして何が最初には、怖がる氣持を起させられるものと考へ、たまたま、夫の妻なり、猫の妻なりが鬼までも来たので、それから夫や猫を怖がるやうになつたものでありませう。例へば、<sup>りい</sup>無先で子供といつても、夫をのやして居る親が、その夫の頭の上の方で、食べ物を見せながら「ワトソン」というたものをあげよう、<sup>りい</sup>などといつて居る場面をよく見つけますけれども、かういふ時夫は、食べたいといふ強いの本能にかられて、全身の勢力を皆聲にした



と思はれるばかりの、とてつもない大きな聲で、しかも突然に、「ワン」と吠え出します。この大きな音が、どうして子供の心に恐怖心を起させずにおさませう。たとへそれは泣き出す程までの強さには、現れて来なかつたにしても、必ずやその内面に、一種の恐怖心を呼び起してゐるにちがひないのであります。

かくて次第に犬を見ることを怖がり、それに似よりの猫や、馬や、牛などの獸を見ることを怖がるといふ習慣になつて行くのでありませう。

「いけません」かやうに、大きな音を突然聞かされるといふことは、どんな子供に對しても、生れつき恐怖心を起させるものであります。それと同時に、熱いもの、冷たいもの、刺すやうに痛いものなどに對しても、子供らは、怖がらないまでも、それから避けようとする態度を示すものであるといふことについて、一應考へておく必要があります。なせなれば、この避けようとする態度なり、引込めようとする動作なりが、心の働き全體に對して、引込勝ちな習慣を植まつけ、そのために次第に臆病になつて行くといふ結果にな

ることがあるからであります。子供が一度お風呂で、熱いといふ感じを起して、手を引込め、全身をすくめてしまふと、その次から、お風呂場を見ただけで、すくみ上り、はては怖がつて泣き出すといふことがしばしば起るものであります。

かやうな「すくみ上り」や「引込み」の感じを起させて、事毎に、子供を臆病にさせてしまふやうな原因が、しばしば家庭で與へられます。母親なり、父親なりが、不用意に發するところの「いけません」とか「コラッ」といふ怒鳴り聲がそれでありませう。

これは、大きな音を突然發するといふ點で、どんな子供にも、先づ恐怖心を起させますが、更に、何か驚かすとして、元氣よくさし出した手を、急に引込めるといふことで、「すくみ上り」といふ點から、一層その恐怖心に環をかけたやうな結果になり、かういふことをしばしば繰返してゐると、何時とはなしに、オド／＼した、極端に恐怖心の強い、いはゆる臆病者を作つてしまふやうになるのであります。

従つて臆病な子供を作らないやうにするためには、一つでもその原因を少なくするため



は、出来るだけ家庭の中から、「いけません」といつてけなしつけるやうな、否定的な怒鳴り聲を除くやうに心がけることが、最も望ましいことでもあります。

その他、急にからだの安定を失つて倒れるやうなこともまた、どんな子供でも、生れながらの恐怖心を呼び起すところの原因となるものでありますから、子供を不意に引倒すやうなことは、勿論絶対に避けなければなりません。お風呂に入れる時、浴槽の中で、子供のからだを、充分安定するやうに抱いてやりませんと、子供がお湯の中で倒れさうな、不安定な感じを持つために、本能的に恐怖心を起すことがありますし、又流し場などで、過つて轉んだりすると、たとへ痛みを感ずる程打つたのでなくとも、たと引つくりかへるといふこと、即ち支へを失つて、不安定の感じを経験したといふことだけで、本能的な恐怖心を起すこともあります。かういふことをしばしば繰返してゐるうちに、その恐怖心と、その時見たお風呂場といふものが結びついて、今度は逆に、お風呂場を見さへすれば、すぐ怖がつて入りたがらないやうになるといふ結果にもなるのであります。

四かやうに突然大きな音を出すとか、すくみ上らせるとか、不安定にするとかいふことはどんな子供に對しても、生れながらにして恐怖心を起させるところの原因となるものであります。それ以外の事柄は、ほとんど皆、生れた後につけ加へられた恐怖心であり、又臆病でありますから、家庭の努力によつて、次第々々にその臆病を矯正することが出来るものであります。

六勿論、生れてからの習慣でありますから、成るべく早くそれを発見して、早く手當すれば、それだけ矯正の効果が著しくなるものであります。

かやうな臆病の習慣は、満三歳頃までの間に、完全に作り上げられるものであると、ワットソンなども云つてゐる程でありますから、それまでの間の、幼児の家庭教育といふものは、すむぶん責任の重いものであり、臆病な子を作るか作らぬかは、この三つ子の時代の、家庭の教育のやり方如何にかゝつてゐるといつてもいい程であります。

幼児の怖がるもの しかれば、この時代から、幼児期の終りにかけて、子供らはどんな



ものを怖がるやうに習慣づけられてゐるものかといふことを、一通り心得ておくことは、我が子の特色を知り、それにもとづいて、適宜な導き方を工夫して行く時に、役立つことと思はれますから、私が多数の幼児の家庭について、詳しく調査した結果の一端を、これにお話することにいたします。

その結果は、年齢及び男女の違いで、多少異つてゐますけれども、大體の傾向から見ますと、雷鳴・蛇・暗い所等を怖がるものが最も多く、これに次ぐものは、犬・化物の話・火・影法師・見知らぬ人・ブランコに乗ること・舟に乗ること等であります。

これらの中で、特に家庭教育上重要だと思はれる、二三の問題について、お話いたしますならば、先づ第一に、暗い所を怖がるといふ子供が、幼児期の初よりも、終りの方に至つて非常に多くなるといふ事實であります。殊に女の子の場合に、この傾向が一層著しくこれを實際の數についてみますと、満四歳の多数の女兒の中に、暗い所を怖がる子供は、四十五パーセントしか現れなかつたのに、四歳半には七十四パーセントに増加し、六歳半

では、八十二パーセントといふ高い割合を示すやうになつてゐます。

これで見ますと、暗い所を怖がるといふ習慣は、小学校入學前までの、幼児期において非常な勢で植ゑつけられてゐるものであるといふことが、はつきり判ります。小学校入學後になりますと、さういふ習慣の子供がだん／＼少なくなりましますけれども、それでも、一度作り上げた習慣は、さう急に無くなつてしまふといふわけにも行かないもので、尋常五年あたりの子供等の間にも、なほ約六十パーセント位、暗い所を怖がる子供が残つて居ります。これから考へましても、幼児期の家庭教育といふことは、非常に大切なことでありまして、幼児の大部分は、この間において、暗い所を怖がるといふ習慣を植ゑつけられてしまふのであります。

次に、蛇を怖がるといふ子供は、男女ともに、年齢の進むに従つてだん／＼多くなり、幼稚園時代の前半頃は、男兒が六十パーセント位、女兒が七十パーセント位であつたものが、幼稚園の終り頃になりますと、男兒は六十五パーセント、女兒は八十パーセント位に



なり、小學校に入るやうになつても、餘り減じません。これは、蛇が恐いものであるといふことを、だん／＼教へられるやうになり、そして、それを避けるといふことが當然必要なことであることを知るからであります。

次に、犬を怖がるといふ子供は、幼兒期には、男女とも大體六十五パーセント前後の割合で現れますが、小學校入學頃から、急に少なくなり、尋常二年になりますと、男兒は二十三パーセント、女兒は四十一パーセントとなり、四年生では、男兒が二十一パーセント、女兒は二十七パーセントといふ少ない割合になつてしまひます。

これなどは、幼い時に、植ゑつけられた習慣が、年と／＼もに、改められて、犬は決して怖いものではないといふことを、子供ら自身、やうやく自覺するやうになつて行くものであることを、物語る事實でありまして、後から植ゑつけられた習慣的な臆病といふものは直せば直るものであるといふことを示すものであります。

**臆病の矯正法** 怖がるといふ本能の働きは、生命の保存を脅かすやうな危険なものを恐れ、これから通れやうとするために働きかけるのであるならば、最も自然なものであり、又極めて大切な働きでありますけれども、隣りの部屋でさへも、暗いから一人で行けないとか、犬さへ見れば、怖がつて母親にしがみつぎ、どうしても離れられないといったやうな、それこそ愚にもつかぬことを、無暗やたらに怖がるといふことは、もはやかやうな正當な恐怖心を通り越して、臆病神にとりつかれてゐるのでありますから、かやうな臆病は出来るだけ早く矯正しなければなりません。

右に述べた、私の調査結果から見ても判るやうに、子供の恐怖心といふものは、年月のたつと／＼もに、次第々々に薄らいで行くものでありますから、多くの場合、自然に放つておいても、時が来れば、少しづつ直つて行くものであるとも云へますけれども、しかし、それをもつと早く導いたならば、餘計な心配や苦勞をせずともすむやうなことが、ずるぶあることと思ひますから、かやうな悪い習慣は、出来るだけ早く直すに越したことはありません。



それには先づ、どういふ原因で、その子が臆病になつたかといふことをよく調べてみる必要があります。例へば、お婆さん好きの孫娘が、非常に臆病なので、その原因を調べてみると、そのお婆さんがまた大の臆病者で、暗くなると、隣りの部屋へも一人では行けないといふ有様、そのため始終側にゐるところのその孫娘までが、何時とはなしに暗い所を怖がるやうになつたものらしいといふことが判つたので、その娘を、しばらくそのお婆さんの側から離して修養させたところ、だん／＼その臆病が直つて行つたといふ實例などは注目に値するものであります。

ところが、どんなに話して聞かせても、教へてやつても、どうしても直らないといふ、臆病な子供もしばしば見受けられますが、これなどは、もはや理窟でも何でもなく、前に述べた實例で示されてゐるやうに、幼い時においてすでに、暗い所とか、獣とかを見せられると同時に、大きな音とか、支へを失ふとかいふ、恐怖心を起させる根本的な原因を興へられて、その強い恐怖心とそれらのものが、固く結びついてゐるのでありますから

その固い自然の結びつけを、自然に解いてやるやうな、特別の手段を講じなければならぬこととなります。

この點について、ワットソンは、幼児の臆病を、實驗的に矯正したところの、興味ある實例を述べて居ります。

兎を怖がる習慣のついてゐる幼児を矯正するために、先づ、毎日一回、午後のお腹の空いてゐる時を選んで、その子供に、食べ物を興へながら、一方で、成るべくその子供から離れたところで、しかも、その子から見えるところに、他の人に頼んで、兎をおいてもらふことにしました。子供は御馳走を食べる時の快感を経験しながら、遠くにゐる兎を見て居ります。そして、その兎は、その子が御馳走を食べてゐる時以外には、決して見せないやうにしたのであります。

翌日又子供が御馳走を食べ始めようとする時、先づその兎を、昨日おいたところにおいて、子供に見せておき、それから、少しその兎を子供の方へ近づけてもらひます。その時



若し、その子が怖がるやうな様子を見せましたならば、兎を近づけることをよしてしまひます。

かうして日一日と、その兎を子供の方へ近づけて行きますと、数日の後には、食卓の上までその兎を近づけても、その子供は、怖がるやうな様子を示さなくなり、おしまひには膝の上に載せられても、少しも怖がらないやうになつてしまひました。

かくて、一度植まつけられた臆病の習慣が、根氣強い實驗的な矯正法によつて、とうとう根こそぎ取除かれ、つひには、兎ばかりでなく、他の獸や、毛皮で作つたものを怖がる習慣をも、見ん事取り除くことが出来たといふことであります。

これはつまり、最初、大きな音を出して、本能的な恐怖心を起させておきながら、それと同時に見せた兎に、その恐怖心の原因を移して行つたものでありますから、今度は、その逆に、御馳走を食べながら、快感を起させておいて、その快感を起しながら、いつしよに見てゐるその兎にも、その快感を移して行つて、次第にその兎と快感との結びつきを強

くさせ、その結果、前に結びつけられた恐怖心と兎との結びつきを、次第に弱まらせて、つひには、御馳走を食べなくとも、その兎を見さへすれば、御馳走を食べてゐた時と同じやうな快感が起つて、何時の間にか、その兎との親しみの感情が出て来るといふ、極めて自然な心の移り變りの原理によつた矯正法でありますから、兒童の心理に最もよく叶つた、矯正法の一つであるといふことが出来ます。

世間によくあるところの、暗いところを怖がる臆病な子供の習慣を直さうと思へば、やはり同じやうな理窟で、御馳走とか、唱歌とか、お話とか、その他子供の快感を呼び起し、さうな、何等かの原因を興へながら、少しづつ、その暗いところに馴れさせて行くといふ方法をとればよいわけでありませう。

例へば、寢室で、子守唄を歌つて聞かせながら、その子に快い感じを起させておいて、だん／＼その部屋の電燈の明るさを減じ、更にその部屋の電燈は消してしまつて、隣りの部屋から、襖の間を漏れて来る位の、仄かな明るさで、子守唄を歌つて聞かせ、つひには



どこからも光の漏れて来ない真暗な部屋で、歌つて聞かせるといふやうな順序で、快い氣持と暗い所とを結びつけてやるならば、やがてその子の暗い所を怖がる臆病の習慣を取除いてしまふことが出来るわけであります。

## 二 怒りつばい子供の原因と矯正法

怒る原因 怒は、人間に生れながらにして與へられた、強い情緒でありまして、それが激しくなると、聲を立てたり、手を振り廻したり、人をなぐつたり、物をとつて投げつけたりするやうな亂暴ともなります。どこの子供にもよく見受けられる喧嘩ずきの本能といふものも、この怒りの情緒が強く外に現はれて来たものであります。

かういふ怒の情緒とか、喧嘩本能といふものも正義のために憤るところの義憤といふやうな形で現れるならば、それは誠に望ましいことでありますけれども、これに反して、何でもなしいことに、すぐ怒り出したり、亂暴し始めたりするといふことになりますと、そ

の子の將來の圓滿な人格の發達に對しても、よくない影響を與へるものでありますから、家庭教育上餘程注意しなければならぬ問題となるのであります。

子供の怒りつばい性質は、どうして作り上げられるかといふことについては、すでに前の「乳兒の教育的な取扱方」といふところで、少しく述べて来たのであります。要するに、子供の運動とか、慾望とかを妨げることが、一番大きな原因であつて、それ以外の事柄は、大抵この根本原因が元で、すでに怒りの感情を起してゐるところへ、後から結びつけられて、怒を誘ふ原因となつたものでありますから、従つて、それらは、生れてから後の習慣で植ゑつけられたものといふことが出来ます。

このことについてもワットソンは、念入りの實驗をいたしまして、結局、赤ちやんは、そのからだのどこかをつかまへられて、その自由を束縛された時に、怒りを表すものであるといふことを明らかにして居ります。

子供の運動の自由を束縛し、その慾望を抑へつけるといふことは、日常の家庭生活にお



いても、しばしば見つけられるところでありまして、乳児のところであげた、入浴の際の着物の脱がせ方、着せ方を素早く、手際よくやらないと、怒りつばい子供を作つてしまふものであるといふ例など、幼児の場合でもよく當てはまる例であります。

その他、たま／＼訪ねて来た叔父さんが、子供の御機嫌をとるつもりで、「どうれ、どんなに重くなつたか、叔父さんがだつこしてみよう」など、お世辭を振りまきながら、子供を膝の上に引ずり上げて、強く抱きしめようとする時など、子供は自分の活動しようとする慾望を抑へつけられるので、嫌がつてその手からすり抜け、時には「イヤア」と叫んで叔父さんの手をひつぽたいて逃げ出すといふ場面を見うけることもあります。これなどは、やはり自由を束縛されたために、軽い怒りの感情を起し、つひそれが亂暴といふところまで行つてしまつた例でありまして、児童の心理を辨へない叔父さんならば「何てこの子は亂暴な子だらう」といつて腹を立てるかも知れませんが、それは、腹を立てる方に無理があるのであります。

もしこんなことが、しばしば繰返されるやうなことにでもなると、丁度前の暗い所を怖がる子供を作り上げる例のところまで述べたと同じやうな理由で、その子供は叔父さんに抱きしめられて、不自由な思をした、めに起した怒りの情緒と、その叔父さんの顔とを、心の中に強く結びつけられて、今度は、抱きしめられなくとも、叔父さんの顔を見さへすれば、すぐ腹だ、しくなつたり、怒りつぽくなつたり、果ては亂暴を働きたくなつたりするといふ結果になることがあります。

亂暴な子供を直した實例 子供の運動を束縛することは、子供を怒りつぽくさせる一つの原因であるといふことから考へて、運動したいといふ氣持、遊びたいといふ慾望を抑へつけるといふことも亦、やがて怒りつばい子供を作りあげる原因を與へるものであるといふことは、當然考へられることであります。

この理由からして、手におへない亂暴な子供を直すことの出來た、私の實験例をお話することにいたします。それは、八歳になる低能な女の兒で、私のところへ相談に参りまし



た時の親の訴へは、事象に達しても、ろくに言葉もいへず、三つか四つ位の子供の智慧し  
かなく、それに時々亂暴するので、非常に困つてゐるから、何とかして亂暴を鎮め、少し  
でも言葉のいへるやうに導く方法がないでせうかといふことでありました。勿論教育相談  
所へ来るまでには、大學病院の精神科、小兒科等の各科へつれて行つては、それらの專  
門の博士にも診てもらつたものですが、どこへ行つても、これは生れつまだから、どうに  
もしやうがないといつて見離されてしまつたといふのであります。

そこで私は、醫學の方で見棄てられた子供でも、まだ心理學の力と教育の愛とが残され  
てゐる以上、必ずしも教へないものでもないだらうといふ信念をもつことが出来ましたの  
で、とにかく、研究的に一生懸命調べてみますから、一切の處置法を私に全部任せ切つて  
しまふやうにといふ條件で、いよくその子供の指導を引受けることにいたしました。  
それから、適當な家庭教師を選んで、しばらくその子の家庭に住まはせ、その子供の生  
活状態を詳細に觀察させ、かつそれを一々私に報告させることにいたしました。かうして

觀察してゐると、成程これは聞きしにまさる亂暴な子供で、ほとんど氣違ひじみてゐると  
いつてもいゝ程の振舞ひを、毎日々々繰返してゐるのであります。

別にこれといつて取立てるやうな直接の原因も見當らないのに、二時間か三時間位たつ  
と、急に機嫌が悪くなつて来て、みる／＼うちにカッとなつて怒り出し、何だか譯のわか  
らないことを口ずさんでは喚き立てる、泣き叫ぶ、はてはそこいらにある火箸であらうが  
鉄であらうが、手當り次第取つてぶつけるといふ狂亂沙汰、そして二十分間位荒狂つたか  
と思ふと、やがて平靜になつて、機嫌も直る。それから二時間か三時間位平靜な状態を續  
けてゐるうちに、又しても前の亂暴が突發する。何しろそれが突然勃發するものでありま  
すから、初の間は、家庭教師も身をかむす暇がなく、その子の投げつけた品物に傷つけ  
られ、からだに怪我が絶えないといふ有様でありました。かういふ狂亂の状態が、今まで  
永い間續いて、近頃それが特に甚だしくなつて来たので、親が心配して教育相談所を訪れ  
た譯だつたのであります。



そこで私は、この子供のかやうな氣違ひじみた亂暴の原因を診断するために、その家庭教師に命じて、いろいろの事柄を調べさせたのでありますが、その中で最も大切だと思はれましたことは、低能な子供であるところから、彼は世間態をばちて、その子をほとんど外へ連れ出さなかつたといふ事實であります。

これは、たとへ低能児であるにしても、八歳にもなれば、遊びたいといふ自然の欲求が非常に強いものであるにもかかわらず、その欲求を無視し、これを極端に束縛したところの、最も不自然な取扱ひでありまして、この子供の亂暴の原因も、或はこゝに存するのではないかといふ懸念を抱かせるのに充分な事實であります。

かくて私は、先づこの原因を除くことが、この子の教育的治療上最も重要な問題であるといふ點に到達いたしましたので、早速その處置法について、家庭教師に内命を與へました。それは、もうそろそろ亂暴が始まる時刻だと思はれる少し前に、外へ連れ出して遊ばせるといふ、極めて簡単な治療法であります。

ところが私のこの心理學的診断とその治療法とが、見ん事適中いたしまして、遊びに出ると、不思議にも、亂暴が始める筈の時刻が来ても、なか／＼亂暴が始まらず、その爲に今まで二時間か三時間おきに亂暴してゐたものが、四時間か五時間おき位になるといふやうに、平常な状態の時間が延びるやうになつて來ました。

この方針で指導を續けてゐる間に、今まで一日に五六回位の發作のあつたものが、四五回に減じ、三四回に減じ、そのうちに、全々起らない日も出て來るやうになり、はては、三日に一週、四日は一週といふやうに、偶にしか起らないやうになり、つひにこの治療法を始めてから、三ヶ月にして、完全にその發作的な亂暴を治療してしまふことが出來たのであります。

その後今日まで三ヶ年を經過して居りますけれども、あれつまり、あの亂暴は消え失せて、少しも再發しないといふ好結果を示して居ります。

第二の實例は、尋常六年の男の見で、幼兒のところでお話するのは少し不適當かも知れ



ませなければ、内容から見ると、前の例とよく似て居りますから、便宜上こゝに附加へてお話ししようとするものでありますが、それは、父の勤めの都合で、半年程前に、現在の家に引越して来てから、どういふものか、その子の氣性が荒々しくなり、御飯の時など、少しでも氣に入らないおかづがあると、すぐカツとなつて、怒り出し、箸を放り出す、茶碗をたゞきつける、はては、「ワー／＼」と大聲をあげて喚き立て、手足をものがきながら十分か二十分間位荒れ狂ふといふ困つた子供、それに近頃よく母親に楯ついては、喚きたるといふやうな有様なので、家庭でもほと／＼もて餘してゐるが、何とかよい指導法がないものかといふ相談なのであります。

この子供は、學校の成績も中以上で、學校では少しも非難の打ちどころのない子供なのであります。たゞ近頃になつて、家庭でかやうな亂暴を始めるやうになつたので、親が心配し出したといふ相談なのであります。

そこでいろいろ調べてみますと、やはりその子をさうさせた原因が立派に備つてゐるのであります。それは、今まで住んでゐた家は、近所に子供が多く、その子も、始終それらの子供と遊んでゐたのであります。今度の家は、近所に一人の遊び友達もなく、そのため、自然家の中で暮す時間が多くなり、おまけに、中學校の受験準備が迫つて来た、めに閉ぢこもる生活が一層多くなつたといふ事實であります。

それから、その親に、子供がどうして怒りつぽくなるものであるかといふことについてよく聞き聞かせた上で、先づその子の狂亂を救ふためには、勉強よりも、遊びを選ばなければならぬことをお話しして、子供が喜んで熱中するやうな、全身運動の遊びを選ぶやうにそれ／＼その種類などを教へて歸しました。

その後この子供は、自転車を買つてもらつて、暇さへあれば、夢中で乗廻して遊んでゐるうちに、とう／＼今までの亂暴が、何時とはなしに消え失せてしまつたのであります。

これらの實例から見ましても、遊びたいといふ、子供の自然の慾求を抑へつけるといふことは、子供のからだを抑へつけて、その運動の自由を奪ふと同じやうに、子供の心に怒



りの情緒を、知らず／＼の間に植えつけることになるものであるといふことが、よく了解されることゝ思ひます。

幼児を怒らせる事柄の調査 かやうに幼児は、自分の自由を妨げられた時に怒るといふのが、根本の原因であります。それが日常の實際生活の、どんな事柄に多く現れて来るものであり、そしてそれが、年齢の進びに従つて、どんなに變化して行くものであるかといふ點について、私が多数の幼児の家庭について調査した結果を少しくお話することにいたします。

家庭で觀察される幼児の怒りの中で、一番多く現れるものは「友達にいちめられて」怒るといふことでもあります。これは男の子と女の子とで餘程ちがつた趣を表すものでありまして、男の子の場合ですと、満四歳頃には、五十二パーセント位しか現れて居りませんが五歳頃には、七十九パーセントに昇り、五歳半では九十一パーセントといふ高い割合を示じ、小學校入學後は、着してその割合を減じて行きますが、それでも、他の何れの原因よ

りも、常に最も多い割合を示して居ります。

女の子の場合には、これに反して、四歳の時に最高の割合九十パーセントを示し、五歳には七十八パーセントに降り、その後次第に減じて行く傾向を示して居ります。八十一

これで見ますと、女の子は早く社會的生活に馴れて、お友達と仲よく遊ぶといふことが出来ずけれども、男の子は、その度勢に、次第々に友達との衝突が多くなり、お互に自分を突つては喧嘩をするといふことが長く続き、幼稚園時代の中頃から、やうやく社會的態度が出て来て、友達と融和することが出来るやうになるものであるといふことが示されてゐるやうであります。

かやうな子供の喧嘩は、勿論、子供が、自分の運動なり、慾望なりを妨げられた時に起るものであります。親から見れば、それは、他の子供にいちめられて、怒つたり、泣いたりしてゐるものと見られるのであります。

その次に多く現れる事柄は、親なり、見物なりのために「遊んでゐる玩具を取り上げら



れて」とか、或は「見てゐる繪本を取り上げられて」怒るといふことでありまして、これも大體、男の子の場合では、幼稚園時代の中頃まで次第に多くなり、その後著しく減じて行くといふ傾向を示して居ります。即ち四歳頃には、八十三パーセント位の子供らは、かういふ怒りを家庭で現しますが、五歳になると八十六パーセント、五歳半には八十七パーセントといふやうに次第に増して行つて居ります。

これに反して女の子の場合には、初が多く、後には次第に少なくなつて行くといふ傾向を示し、四歳では九十パーセントといふ高い割合を示して居りますけれども、五歳半には七十七パーセントに減じ、その後次第に減じて行くといふ結果を示して居ります。

かやうに、運動を妨げられるとか、持つてゐる物を取られるとかいふやうな、實際の活動や實際の品物に關係した、謂はゞ具體的な慾望といふものを妨げられた時には、八十パーセントとか九十パーセントとかいふ大部分の子供らは、怒りを感じ、これを顔なり、動作なりに表すものでありますけれども、「親に叱られる」とか、「欲しいとねだる本を與へら

れない」とか、「友達に馬鹿にされる」とかいふやうな、精神的な壓迫とか、拘束とかを受けた時には、かやうな著しい割合で、子供の怒りが現れるものではなく、大概七十パーセント前後といふ割合で現れてゐるやうであります。

幼児を怒らせない方法 今まで述べて参りました事柄で、大體、幼児はどうして怒るか、怒りつばい子供がどうして出来るかといふことについての説明がついたと思ひますから、さてそんならば、怒りつばい子供を作らないやうにするためには、どうしたらよいかといふ、家庭教育上の大事な問題にふれることになるのであります。今まで述べたところにも、ところ／＼その問題にふれて参りましたので、こゝには、まだ述べつくせなかつた點だけについて、簡単にお話ししようと思ひます。

右に述べた私の調査の結果から、幼児の怒りといふものは、年齢の進みに従つて、次第に變つて行くものであり、大體、満五歳半を頂點として、それから次第に下り坂となり小學校に入る頃になると、著しくその現れ方が少なくなるものであるといふ、一般的の傾



向を精勵することが出来るのでありますから、怒りつばい子供を作らぬやうにするためには、先づ幼児期の注意が一番大切であるといふことが判ると、もに、不幸にして、この怒り高い時期に、怒りつばい習慣をつけてしまつたとしても、怒りといふものが、小學校入學後、次第に少なくなつて行くものであるといふ事實からして、決して教育の力で直せないものではないから、一生懸命その矯正のために努力することが必要であるといふことが、はつきりと示されてゐることを、想ひます。

怒りつばい子供を作らないやうにするためには、先づ幼い時分から、その子供を、やさしくかつ手ぎむよく取扱ふといふことを努めなければなりません。着物を着せるにしても、襦袢や袖を洗つてやるにしている。靴下や靴をはかせるにしても、きつく子供の手をしめつけたら、手荒く取扱つたり、ぐづ／＼しながら取扱つたりするといふことは、子供を不快にし、いらださせることでもありますから、母親は勿論のこと、女中や子守に對しても、子供の取扱ひ方を、手際よく進ぶといふ技術を練習させておくことは最も望ましいことでもあります。

次に子供の着物について特別の注意を拂ひ、着せ易く、脱ぎ易いものにするといふことでもあります。この點については、ワットソンは、毛でつくつたシャツのやうに、袖が細くて、からだにひつ／＼くるものや、ボタンが数多くて、そのはあかけに手間のかゝる着物などは、子供殊に赤ちゃんには不適當なものであるとして、日本のきもの式のゆつくりした袖のもので、ボタンも袖や二つまで位にし、それも前の方だけについて居る着物が一番よいといふことを主張して居ります。

次に、子供自身に、身の周りのことを、出来るだけ素早く、テキパキとやつてのける習慣を、早くからつけておくといふことでもあります。着物を着る時などでも、ベチャ／＼話をしながら、着せやうなものなら、何時までも、手を袖に通さうとしては失敗し、またやり直すといふやうなことで、ぐず／＼してゐるうちに、子供が自分でも腹立たしくなつて來るといふわけがあります。それよりは、着物を着る時には、専心そのことに心を向けて、



素早くそれをやりとげてしまふといふ習慣をつけることが、子供の動作を活潑にして、その運動したいといふ慾望を次から次へとほけ出させ、その間に少しも束縛とか、不自由とか、いらだたしさとかといふことを感ぜしめないで通せるといふ點で、どんなにか子供の心を明かにさせることか知れません。

### 三 蒐集・好奇・同情・統率本能の指導

集めたがる本能 幼兒は、自分の生命を保ち、それを立派に伸して行くために必要ないろ／＼の物を欲しがるといふ慾望を、生れながらにして與へられてゐるものでありまして、その中でも、食べ物を欲しがるといふ本能の働きが最も強く、幼兒においては、それが、毎日々々お菓子をおねだるといふ形で現れて参ります。

私が多數の幼兒について調査した結果によりますと、お菓子を欲しがるといふ慾望は、五歳頃の幼兒において最も強く現れ、全體の九十パーセントの者が、絶えずこれでお母様

方を困らせて居ります。その後は、次第にかやうなねだりやの子供が少なくなつて参りますけれども、それでも、尋常三年以後の學童期に入つた子供でも尙六十五パーセント前後の割合で現れて参ります。

次に玩具を欲しがるといふ慾望も、相當多く現れるものでありまして、五歳から五歳半頃までの間に著しくその割合を増し、男兒では八十八パーセント、女兒でも八十二パーセントの子供らが、この慾望を強く現して居ります。その後は急に少くなり、小學校入學の頃には五十パーセント前後となり、尋常四年頃になりますと、三十パーセント臺に降つてしまひます。これによつて見ましても、幼兒期の子供らが、如何に玩具に憧れてゐるか判るでありませう。

繪本を欲しがる心は、玩具を欲しがる心よりもやゝおくれて現れますが、その代り長く続き、小學校時代に入つても相當強く現れて居ります。

かやうな欲しがる心が本になつて、いろ／＼のものを集めるといふ、いはゆる蒐集本能



が次第に目覚めて参ります。特に女兒にこの傾向が強く、色紙、布切れ、貝殻などを集め  
たがるやうになります。この年齢で既に七十パーセント  
私の調べた結果によりますと、色紙を集めてゐる女兒は、満四歳で既に七十パーセント  
といふ割合を示し、その後次第に殖えて、六歳半では八十八パーセントに達しますが、小  
學校入學後は、次第に減つて来るやうであります。布切れを集める女兒も、四歳では五十五パーセントを示し、その後次第に殖えて、六歳  
半には七十八パーセントに達し、その後は、やはり、次第に減つて来るやうであります。  
貝殻を集める女兒は、四歳では二十パーセント位しか現れませんが、その後急激に増加  
して、六歳半では五十三パーセントに昇り、その後は急に減つて参ります。男の子の方は、かやうな集めたがる本能は、比較的少いやうであります。その中でも、  
女兒と同じく、色紙を集めたがる子供が、比較的多く、四歳ですでに五十七パーセントと  
いふ割合を示し、その後更に増して、五歳半では六十三パーセントに達して居ります。

その後やはり、次第に減つて行くやうであります。色紙に次いで、貝殻の集めたがるものは、エムギキ、ガラエ五、貝殻などでありまし  
て、五歳から五歳半頃にかけて、大體四十パーセント前後の割合で現れて来て居ります。  
かやうな蒐集本能も、これを適當に指導してやりますと、知らず／＼の間に、各方面の  
知識を、楽しみながら習得するものでありまして、例へば、動物や、草花のエムギキを集  
めてゐる間に、それらの種類の分け方を知るとか、小學校時代の子供になりますと、外国  
の切手を集めてゐる間に、いろいろの國の名前を覚えるとか、木の葉や、昆虫を集めてゐ  
る間に、その種類や特徴を知りてに観察し會得するとかいふやうなことがそれでありませ  
ぬ。従つて、たとひ偶然と集めるだけでなしに、その集めたものを、適當に分類整理するとい  
ふ態度を、幼い時から植えつけて置くといふことは、大きくなつてから、研究・調査・整  
理といふやうな仕事にたづさはる時の、しつかりした心の持ち方の土臺を築くといふ點か  
ら見ても、極めて必要なことのやうに思はれます。



試みたがる本能。幼児は、言葉の發達するにつれて、いろいろのことを聞きたがる。その、いはゆる質問慾を現して来るものであるといふことは、すでに述べて來ましたが、それとともに、玩具をこわして中を調べてみたり、包物を開いては中味を改めてみたり、抽出を引いては中の物をかき廻してみたりするところの、何でもやつてみるといふ、試みの本能、或は實驗的興味といふものが、次第に現れて參ります。

これらは、新しいこと、珍しいことを好むといふ好奇本能の現れでありまして、又一面知識慾の現れとも見ることが出來ます。この知識慾の芽生えを、たゞ單に、子供のいたづらとして抑へつけてしまふといふことは、子供の心の發達に對して、よくない影響を及ぼすものでありますから、親はよくこの點に注意して、その指導を誤らないやうにしなければなりません。

幼児の實驗的興味の種類について、私の調べた結果によりますと、男女を通じて、最も多く現れる行動は、「包んであるものをほどいてみる」といふ試みであります。満四歳の幼

児においては、男児が七十八パーセント、女児が七十五パーセントといふ割合を示し、その後次第に減つて、小學校に入る前には、四十パーセント前後になつてしまひます。

その次は、「男の子の玩具をこわしてみる」といふ試みで、これは四歳の頃には六十五パーセント位の割合で現れますが、その後は次第に増加して、五歳半では七十パーセントとなり、それから後は、急に減つて行くやうであります。女の子の方は、この試みがや、少なく、四歳では四十五パーセントを示すだけに止り、しかもその後は更に減つて、六歳では三十八パーセントしか現れて居らず、小學校入學後は急激に減つて參ります。

これに反して、「抽出を開けてみる」といふ試みは、男児よりも女児に多く、四歳では六十五パーセントを示し、その後次第に減つて行きますが、男児の場合は、四歳で五十二パーセントしか現れず、その後はやはり次第に減つて參ります。

その他極めて少数ではありますけれども、「どんぼのしつぽを切つてみる」とか、「タバコを吸つてみる」とか、「人のいやがるものをわざと食べてみる」といふ物好きなことを試み



たがる子供らも、十パーセント内外現れて居りますが、これらは皆、新しいことを知らうとする本能の働きでありまして、何も子供に、特別な目的とか、意地悪とかであつてするのではありませんから、若しそれが、タバコを吸ふとか、残忍性を植ゑつけるとかの、悪い習慣に陥るやうな心配のある時には、次第にそれを改めるやうにしなければなりませんけれども、さうでもなければ、出来るだけ實驗的態度を向上させる意味で、かういふ試みを片端から叱りつけてしまふといふことは、家庭教育上大いに考へなければならぬこと、思ひます。

同書、幼児は、年齢の進びに従つて、次第に、遊び相手を求めたがるやうになるものであるといふことは、前に述べましたが、それは、とりもなほさず、他の人々といつしよに居りたいといふ社会的な本能の現れであります。

友達といつしよにゐたがる傾向の現れてゐる子供の割合について、私の調べた結果によりますと、女の子にそれが最も多く現はれ、四歳の子供の八十パーセントまでがその慾求

を現し、その後次第に増して、六歳半頃には、九十四パーセントといふ高い割合を示して居ります。

男の子はこれよりもやゝ少ないけれども、それでも四歳で七十パーセントを示し、その後次第に増して、五歳半では九十一パーセントに達して居ります。

仲間といつしよに遊びたいといふ慾望の現れる頃には、自分の氣持をもつて、相手の氣持を察するといふ同情の心が、本能的に目覺め始めます。

他の子供の泣いてゐるのを見て、可愛さうだといふ表情を表し、或は自分もいつしよに泣くといつたやうな同情心の芽生えが、各年齢の幼児において、どんな割合で現れて來るかといふ點についても、私の調査した結果によりますと、女の子には比較的多く現れるものでありまして、四歳では八十パーセントを示し、その後少しづつ増加して行つて居ります。殊にこれは、他の本能のやうに、小學校入學後急に減ずるといふことがなく、永く續くとこの本能であります。



男の子は、初は比較的少なく、四歳では六十五パーセントしか現れて居りませんが、その後急に増加して、六歳半では、ほとんど女兒に近くなり、その後の傾向も大體男兒と同様であります。この傾向は、六歳半から七歳半にかけて、最も著しく現れて居るものと見られます。その他、犬の怪我したのを見て同情するとか、人形のとわれたのを見て同情するといふやうな表情や態度なども、幼児期の中頃から終りの方へかけて、著しく發達して參ります。かういふ時期には、やはり、多くの子供らと交はらせて、この自然に現れて来る同情心の發達を、促すやうな方法をとることが、家庭教育上大切であります。一人子に、とかく冷淡な子が出来るといはれますのも、かやうな同情心を發露させるべき大事な幼児期に、兄弟間の同情心を表すべき適當な機会が與へられなかつたといふことにもよるのでありますから、一人子をもつ親は、特にこの點に留意して、出来るだけ遊び相手を作つてやるやうに努める必要があります。

お山の犬將氣取りの幼兒は、仲間と遊びたいといふ社交的本能をもち、仲間の困つてゐるのを見て同情するといふ本能を現しますとともに、他方においては、仲間を支配し、お山の犬將氣取りをしたといふ統率本能を示すこともまた、自然の欲求であります。

これは、一面から見れば、威張りたがる心の芽生えともなるのでありますが、他面また人に褒められることを喜び、名譽を重んじ、競争を好むといふ心の土臺ともなる、本能の働きでありますから、これを適當に發達させるといふことは望ましいことでもあります。

褒められて喜ぶといふ態度について私の調べた結果によりますと、幼児期を通じて、男の子は八十五パーセント前後、女の子は八十パーセント前後といふ高い割合を示して居ります。

この強い本能を利用し、子供の自尊心を重んじて指導するといふことは、非常な効果をもたらすのであります。子供に何か仕事をさせようとする時、よく「お懶巧さんネ」といひて、おだて、やることがありますが、さういふ時、子供がどんなに喜んでそれを成しとげるかは、子供を取扱ふ者の誰でも知つてゐるところであります。そしてその仕事を成



し終へた時、「よく出来ましたネ、ほんとうにも精巧さんでしたネ」といつて褒めてやりま  
すと、子供は得意になつて、もつとく／＼やりたいといふ態度を示すものであるといふこと  
もまた、よく知られて居ります。

このおだてに来る氣持を適當に利用して「あなたに、それがきつと出来るのだ」といふ  
強い暗示を與へた結果、さむぶん幼稚園でももて餘してゐた、亂暴な、やんちゃな我がま  
ゝ女子を、見違へる程の良い子に轉換させることの出来た。私の教育的治療法の實際例な  
どから考へましても、このお山の大将氣どりの強い統率本能または優越本能、或は名譽心  
といふものを、適當に利用するといふことは、家庭教育上非常に大切なことのやうに思は  
れます。

殊に彼に述べらるやうな、劣等生や低能兒などの指導に於いて、往々親も教師も、この子  
供の自然の力を無視して、自分は駄目なものだといふ劣等感に裏はれるやうに仕向けてし  
まふために、新角伸びようとする天分をもみす／＼踏みにじつてしまふといふことも、し

ばく起るものでありますから、特にこの點は、お互に深く反省してみなければなりません。

一 階級の見方

第十講 階級の一環としての家庭教育



## 第十講 幼児の一般的特色と家庭教育

### 一 智能の現れ

幼児の特色の概観 乳児時代を過ぎて、幼児の時代に入ると、先づ言葉を使い始める、繪を書き始める、歌を歌ひ始めるといふやうに、次から次へと、今までに現れなかつた、いろ／＼な心の働き方が、はつきりと外に現し出されるやうになつて参ります。殊に遊びに熱中してゐる間に、何時とはなしに、その心やからだを練り鍛へて行くといふことが、幼児の時代における最も著しい特色でありまして、幼児期は結局、遊戯時代であるといつてしまつてもいゝ程であります。

遊ぶといふ働きは、子供が生れながらにして興へられた本能でありまして、この本能が幼児期において特に盛んであるといふことは、やがて、幼児期は、本能の働きの最も盛ん

な時代であるといふことにもなるのであります。事實、今まで述べて参りました、私の、多数の幼児及び學童について調査した本能の研究結果から見ましても、幼児期の中頃から終り頃にかけて、各種の本能の現れが、最も著しいものであるといふことを、それ／＼の本能についての統計的な数字が證明してゐるのでありますから、一層この感を深からしめるものであります。

本能は、最も適當な運動の仕方で、最も容易に、その子供の生命の保持發達に役立つやうに、絶えず繰返し／＼働くところの、生れながらの働きであります。この他に、幼児期に入る頃から、突然現れて來るところの、特別な、生れながらの働きのあることに、誰しも気がつくのでありませう。それは、何か必要に迫られた時だけ、極く稀に、ひよつこりと働きかけるものでありまして、その目的と手段とをうまく結びつけて、新しい解決法を發見して行くところの、特別な心の働きであります。通例賢さとか、伶俐さといはれるところの、智能の働きのそれです。この智能の芽生えといふ突然の變化は、乳児期か



ち幼児期へ通り抜けようとするところの、幼児の時代に現れる、大事な一般的特色の一つであります。

その他に、自己または自我感情に対する目覚めが現れて来て、著しく自己中心的な心の働き方を現すに至るものであるといふことも、幼児期の大事な一般的特色の一つとして、見通すことが出来ません。そこでこの智能と自己中心性との二つの特色について少しく述べてみることにいたします。

洞察の力 飲んだり、食べたり、遊んだりして、その日／＼を送る幼な見にはほとんど考へるといふ必要がなく、たゞ本能の命ずるがまゝに動いて行けばよいのでありますが、どうかすると、自分の慾望とか、目的とかを達するため、何かしら考へるやうな様子をしておるなど見る間に、突然妙案でも浮んだらしく、運動を始めると、間もなく、うまう、まとその慾望なり、目的なりを達するところの、立派な手段を講ずるといふやうなことが時々見受けられます。

力 察 洞 の 猿



220—221



このことについて、ドイツの兒童心理學者ビュローラーは生後十ヶ月の幼兒が、遠い所に  
おいてあるビスケットを手に入れようとして、そのビスケットに結びつけられた糸が、手  
近に来てゐることに気がついて、その糸を引けば、ビスケットが引寄せられるものだとい  
ふことを發見することが出来たといふ實驗例をあげて、かやうな智慧は、普通生後十ヶ月  
乃至一年の頃から現れ始めるものであつて、丁度チンパンデーといふ、人間に最も近い種  
類の猿類も類人猿に現れると同じ程度の智能であるから、この頃の幼兒の時代を、チンパ  
ンデー時代と名づけてもいと述べて居ります。

類人猿については、ドイツの心理學者ケーラーが、いろいろの實驗を試みて居りますが  
その一例として、チンパンデーが、高い所にぶら下げられてゐるバナナ、を手に入れようとして、  
その傍にあつた箱を引きずり出して来て、それを重ねた上でその上に登り、とうとう  
そのバナナを手に入れたといふ實驗例をあげて、この場合のチンパンデーのやり方は、  
犬や猫のやうに、前後の考へもなしに、何運もく、いろいろの試みをやつては失敗し、



失敗しては又やり直すといふことを繰返してゐる間に、偶然の機会から、その食べ物を手に入れるといふやうな、さやうな繰返しとか、訓練とかいふやり方をせず、むしろ、ちつとして、しばらく何事か考へるやうな様子を見せてゐるかと思ふと、やがて突然箱の側へ出かけて行つて、それを引取り出し、それを重ね、それに登るといふやうに、その目的と手段との關係を、うまく考へ當てるところの、洞察力を働かせて、その目的を達するものであつて、この力が即ちほんとうの智能であるといふことを述べて居ります。

ビューラーのやうな、特別の實驗をやれば、幼児の智能的な活動を、生後一年前後のところで觀察し得るわけがありますが、日常の生活に現れる、自然の状態を觀察しようと思へば、やはり一年三ヶ月以後の、歩き出してゐるの活動と始めるやうになつてからでないといふ、なかつた觀察の機會を捕へ難いものであります。

私は偶然にも、私の長男の満一歳七ヶ月の時に、丁度ビューラーの發見したチンパンジーの智能の働き方と同じ形の、幼児の智能の現れ方を、始めて發見することが出来ました。

それは、部屋の片隅においてある高さ三尺程の茶箆筒の上に、鉛の入つてゐる籠が載せられてあるのを見つけて、それを手に入れようとした時の彼の行動によつて示されたものであります。初め彼は籠の上に立つたまゝで下から手をさし延べたのであります。到底届くべくもありませんので、手を引込めて、しばらくあたりを見廻して居りましたが、少し離れたところに、食卓がおかれてあるのに眼がつくと、大急ぎでその食卓を引きずり出して、茶箆筒のすぐ下まで運ぶと、今度はその食卓の上によち登つて、その上に立ち、手を伸ばしてやすくとその籠を手に入れたのであります。かやうな方法は勿論誰も教へたことがなく食卓に登るといふことも、未だかつてやつてみせたこともなければ、彼自身でもやつてみたことのない行動であります。

かやうにしてチンパンジー時代に入つた幼児は、チンパンジーよりも、もつと速い速度で、その洞察力又は智能を發達させて、一層人間らしい働き方に近づいてあります。智能検査法 かやうな智能の働きは、その幼児の生れつきとして、親代々から與へられ



たものでもありますが、その賢さの優劣とか、發達の程度とかいふものは、一定の學問的な方法で、はつきりと検査することの出来るものであります。いはゆるメンタル・テストといふのがそれでありまして、その中でも、特に「知能テスト」と呼ばれる方法が、直接にこの知能を検査するところの方法であります。

この検査法は、二十世紀の初めに、フランスのビネーといふ心理學者がまとめて發表いたしましたから、ビネー・テストといふ名稱のもとに、世界各国で行はれるやうになり、我が國でも多くの學者によつて、その翻譯や、改定法が作られました。私もその一種を研究して、既に發表いたしました。これらの方法は、相當にその手續が六ヶしいので、一般家庭で實用に供するのには、いさゝか不便なところがあるだらうと思ひまして、別に、大體の傾向を知ることだけ役立つところの、新しい簡易知能テストといふものを作りまして、拙著「家庭で出来る心の診断尺度」第四章に述べておきましたから、それを参照されるやうにお奨めいたします。

## 二 自己中心性

我が國の子供は我がまゝなもので、食べたらしいと欲望でも起ると、食べさせてもらふまでは、駄々をこねて止まないものであるといふことは、誰でも知つてゐるところであります。これは他の人の氣持とか、言ひつけとかいふことを、考へることが出来ず、たゞ自分のことだけしか考へられないところの、自分本位とか、自己中心とかいふ心の特色から發するものであります。すべてのものは、自分の考へるまゝになるものだと考へる、子供の心の自然の傾きであります。

されば、人形も自分と同じやうに、御飯を食べるものだと思ひ込んで、人形の口へ御飯を押しつけてみたり、夫も自分と同じやうに話すものだと思ひ込んで、夫に話しかけたりするといふことが、しばしば起るものであります。

かやうに、すべての事は自分と同じやうなもの、自分の思ふやうになるものと考へてゐる



るところに、子供の我がまゝといふものが生れ出るものでありますが、かやうな我がまゝは、言葉を使い始める頃からだん／＼現れて来るものであるといふ點から考へて、幼児期の初からつままとつてゐる根本の特色といつていゝでせう。例へば、母が土瓶から茶碗へ水を注いでゐるところでも見ようものなら、早速母の手にしがみついて「坊やが、坊やが！」と喚びたて、自分にさせろとせがみます。かやうな時、「こぼすから駄目だ！」とか何とかいつて、それを止めさせようとしても、なかく聞き入れず「坊やが／＼」を繰返し、はては「ア／＼」と泣き叫んで、何でもかんでも自分の思ひを通すまでは止めないといふ場面をしばしば見うけるものであります。

言葉を使い始める頃から、子供はよく獨り言を言つてゐることがありますが、これなども、他の人に聞いてもらはうとか、解らせようとかいふ氣持がまだ現れずに、たと自分でしやべりたいからしやべつて自分で満足してゐるといふ自己中心的な心の働きから来るものであります。獨り遊びをしたがる幼児の心なども、やはりこの自己中心性の現れと見

ることが出来ます。

**反抗** かやうな我がまゝの心が、單に人のいふことをさかないで、自分の思ひを通すといふことだけでなしに、人に向つて、その氣持をおつ／＼けて來ることがあります。何かいふとすぐ「イヤァ！」といつて、口ごたへをするといふ態度がそれであります。

私の長男の觀察記録で申し上げます、滿一歳九ヶ月目に、始めてこの反抗の傾向を認めることが出来ます。それは、「一つ・二つ・三つ」といふ勘定を口ずさんでゐる時、たまたま誤つて、「一つ・三つ」と云つてしまつたので、側で聞いてゐた母親が、「オヤちがつた、一つ・二つ・三つとらふのでしたネ」といふと、彼は聞かぬ振をしてゐると、「一つ・三つ」と數へ、「オヤ又ちがつた」といふと、彼はわざと大きな聲を張り上げて、「一つ・三つ」と言ひのけてしまつたのであります。

然し、その後獨り言のやうに、自分だけで數へる時には、ちやんと「一つ・二つ・三つ」と正しく數へてゐるのでありますから、決して「一つ・三つ」と覚え込んでゐるのではな



くして、たゞ子供が自分で思ふ通りに言つてみたい氣持でゐるところへ、大人が干渉したものでありますから、どこまでも自分の思ひを通じたいといふ我がまゝから出て来たところの、一種の反抗的な自己中心態度の現れにすぎないのであります。

こんな時、強いて直さうと思つてあせると、かへつて子供の反抗心をそゝるだけで、何等得るところがなくなるものでありますから、それからしばらくの間、數へることについては、絶対に母から口を出さないやうに、その問題にふれさせないやうにして居りましたところ、一ヶ月ばかりたつ間に、何時の間にか「一つ・三つ」といふ茶を氣分の數へ方をすつかり忘れてしまつて、何時聞かれても、正しく「一つ・二つ・三つ」と答へるやうになりました。

ところが、一歳十ヶ月目から、今度はしきりに「イヤ！」といつては反抗することを試みるやうになり、更に「おしつこは！」といつてきくと、「ナアイ」といつて斷つておきながら、しばらくすると自分で「おしつこ！」と催促しますので、女中がやつてやらうと思

つて近づくと又「ナアイ」といひ、こんなことを二度も三度も繰返しては大人のいふことに反對するといふ働きが現れるやうになつて参りました。

この頃母親が「ビョ〜ひよこが、かあちゃんどねんね」といつて聞かせると、彼は大聲を張りあげて「とうちゃんどねんね」と、母親と反對のことを言つては自分の思ひを通すといふことが現れて参りました。

これらは皆、子供が自分の思つたことを中心にして、すべてのことを考へかつ行はうとする、自己中心的な特色から出て来るものでありますから、この時期の特色を無視して、何でもかんでも大人のいふことに従はせようとするのは、子供の自然の發達の順序に添はない無理な導き方となるために、かへつて、反抗心を強めすぎたり、ひねくれた氣持を植ゑつけたりして、良くない結果を來すことにもなるのでありますから、出来るだけ、子供の心の發達の時期々々に應じた、自然の導き方を重んずるといふ方針で、家庭教育に臨んで頂くことが最も望ましいこととあります。



今まで食べた、飲みたい、遊びたいの本能のまに／＼、我がまゝ勝手な生活を續けて  
 のた幼児が、知らない、學びたい、仲よくしたいといふ新しい慾望にかられて大勢の子供  
 らと仲よく生活して行かうといふ態度を表すやうになるといふことは、子供の心の發達に  
 おける大きな變化であります。幼児から學童へといふ移り變りは、この心の變化を基にし  
 て現はれるものであつて、世界各國が、漸次度をもつて學齡期と定め、この國からいよ  
 と家庭生活から離して、學校生活といふ新しい生活環境の中に入り込ませようとしてゐる  
 のも、この子供の心の自然の發達順序に則つたものであります。この幼児から學童へとい  
 う變化に就いては次の講にもして詳しくお話いたします。

## 下 篇 學童の心理と家庭教育



## 下 第一章 學童の心理と家庭教育

### 第十一講 學童の特色と家庭教育

#### 一 學童の心理的特色

遊戯から學習へ 幼兒から學童へといふ大きな變化の一つとして現れるものは、遊びに夢中であつた子供の心の中に、文字を讀むとか、數をかぞへるとかといふ新しい事を學ぼうとする態度が強く現れ、一度學んだ事を永く記憶する働の盛になることでもあります。然しかやうな心の變化は突然起るものではなくて、丁度夜がはのくくと明け初める時のやうに、何時とはなしに、遊び中心の時代から、學び中心の時代へと移り變つて行くものでありますから、小學校入學と同時に、今までの遊びを禁じて、おさらびなり勉強なりに熱中させようとするのは、子供の自然の發達に添はない、無理な導き方であることは言ふまでもないことであります。



されば、小學校の一年生あたりの子供では、學ぶといふ心は相當芽生えて來てゐるにしても、その全體の生活といふものは、まだ一遊びを中心として、學びをそれにつけ加へるといふ程度の段階にしか達してゐないものと思はなければなりません。二年三年と進むに従つて、次第に遊びの程度が減じて、學びの程度が増し、四年生頃からは學びが中心となつて、遊びが副となるといふやうに、徐々に發達して行くものであります。然し、いくら學び中心になるからといつても、上級になつたら遊びを止めてもいゝといふのではなくして、やはり、遊びといふことは常に學童の生活にはなくてはならないものであります。この理窟を無視して、子供から遊びを奪ふならば、前にあげた尋常六年の戲暴な男の子の例のやうな結果になるのであります。

衝動から意志へ 食へたいと思へば直ぐ手を出し、遊びたいと思へば直ぐ飛出してしまふといふやうに、前後の考へもなしに、その場々の氣分なり、慾望なりのまゝに行動することを、衝動的な行動と名づけるのであります。幼兒の行動には、かやうな衝動の働

きが非常に多いものであります。その點で幼兒の生活は、動物の生活に最も近いものであるといつていゝでせう。

然るに、學童期に入りますと、かうしてはいけな、あゝしてはいけなといふことを次から次へと、教師や、學友から教へられるやうになります。何かしようと思ふ時でもすぐに音段教へられてゐることが、心の中に湧いて來て、かゝしてはいけな、いやな、かじらと、一應考へ合せて、それから事を行ふといふ、慎重な態度が現れて來ります。かやうな心の態度を意志の働と名づけるのであります。子供が、動物的な生活から脱け出して、一層人間の生活へと入り込むのも、この意志生活が現れて來るからであります。例へば、遊びたいといふ慾望が出た時などでも、すぐ飛び出すといふことをせず、先づおさらびを済まして、それからといふ氣持がすぐ心の中に湧いて來るなどは、學童期に入つて、絶えず働きかける子供の意志生活の一面であります。

何か目的を定めると、それを實現する爲に、いろいろの困難と戦ひながら努力するとい



ふ備さるゝ、やはり意志の働きであつて、早寝、朝起、規律、整頓などといふ、いろいろの構も、かやうな努力なり、意志なりの働きが、次第に發達して来る爲に行はれるものでありますから、意志生活に入り始めた學童期は、かやうな構とか、習慣とかを作り上げて行くのに、極めて大切な時期であるといはねばなりません。

個人から團體へ、幼兒は著しく自己中心的で、我がままで、利己的なものであるといふことは、前にも述べて來ましたが、小學校に入るやうになりますと、子供等は、同じ年頃の多數の學友と交らなければならず、然もそれらの友達は、皆それ／＼自分勝手な慾望を出し合ふのであり又すから、自然そこに、各自の慾望の衝突が起り、今まで家庭で押通して來たやうな我がまが、す／＼と通らないものであるといふことを、何時とはなしに教へられるやうになつて來ます。この學友同志の自然の制裁と相俟つて、他方では子供の心の自然の發達の順序として、皆一緒に遊びたいといふ社會本能が、この頃の子供の心の中に入ります／＼強く目覺めて參ります爲に、學童期の子供等の心といふものは著しく社

會的な、團體的な働き方をするやうに特色づけられて來るものであります。

この特色は、中學年から高學年へと進むに従つて、いよ／＼盛となり、小學校上級の子供等になりますと、仲間同志で決めた約束といふものを、非常に重んじて、時には親の命にさからつてまでも、クラスの者同志で誓つた秘密は絶対に守るといふやうな、固い決心さへもつに至るものであります。

更に進んでは、最も大きな團體であるところの、社會とか、國家といふ團體の爲に、自分の慾望を犠牲にしてまでも盡さなければならぬものであるといふ氣持を抱くやうになり、國を守る爲にどうしても澤山の飛行機を作らなければならぬといふやうな話でも聞かされると、非常に感激して、自分の食ふことや遊ぶことに費してゐた小遣錢を極度に節約して、國防飛行機の資金にといつて、可憐な献金を申出るといふやうなことも、この學童期の中頃から現れる特色であります。

物置から整理へ、學童期への移り變りを物語る精神上的の變化について、學者の間には、



いかゞの意見が行はれて居り得ずけれども、私が多数の幼児及び學童について實驗的に研究した結果から發見することの出來た新しい見地は、子供の好き好みとか、興味とか、理想といふものに現れるところの、この二つの時期の間の、發達上の著しい變化といふことであります。

拙著「家庭で出来る心の診断尺度」第五章の興味型テストを、多数の幼児及び學童に適用した結果、小學校入學以前の幼児の興味は、食へるとか、集めるとか、遊ぶとかいふやうな、著しく物慾的、身體的な興味においてすぐれて居りますが、小學校入學後の學童はこれに反して、新しいことを知るとか、友達の爲に盡すとか、神佛にお参りするとかいふ精神的な慾望、或いは理想といふものに對して、強い興味を感ずるものであつて、この物慾から理想へといふ變化は、小學校入學といふ一時期を境として、一大轉換を來すものであるといふことが、はつきりとした統計の數の上に表示されたのであります。

性能の發達 生れたばかりの赤らぐんは、どの顔を見ても皆同じやうな格恰をしてゐる

けれども、年月のたつに従つて、次第々々にその子供獨特の顔貌を現し、小學校時代になると一層その子供の特色がはつきりして來ると同じやうに、心の働も、幼ない時には、餘り大した違ひを示さないやうに見えるけれども、年月のたつに従つて、懶巧な子供はその懶巧さを益々發揮し、内氣な子供は一層その特色を現して來るといつたやうに、その子供の長所短所といふものを、はつきりと表出するやうになります。

例へば、幼稚園時代には何も特色のない平凡な子供だと思つてゐたものが、小學校に入るやうになつてから、だん／＼繪の天分を發揮して、親や教師を吃驚させるやうな繪を描くやうになつたなど、いふ例がそれであつて、これは、學童期に入るやうになつてから、子供の心の働き方が、いろ／＼の方面に分化して來たことを物語るものであります。

## 二 學童の家庭教育方針

よく遊びよく學べ 學童期の子供の特色が解つたならば、今度はその特色に應じた、最



も適切な指導を加えて行くといふことが必要になつて参ります。この點について今少くも家庭教育の方針といふ立場から、お話を進めてみようかと思ひます。

先づ、遊びから學びへといふ心の發達の移り變りの時期であるといふ點から見ても、小學校の低學年殊に一年生あたりの子供は、遊びを主とし、學びを副とする位の方針で導くことを以て、家庭教育の主眼としなければならぬと思ひます。學校教育でさへも、近頃「學習の遊戯化」といつて、低學年の教育方針は、出来るだけ遊戯の形で行はれなければならぬと主張される程でありますから、家庭としては尙更のこと「善く學び善く遊べ」といふ前に先づ「善く遊び善く學べ」の方針を以て應えなければならぬこと、信じます。

善く學び善く遊べ 三・四年生の中學年時代になりますと、幼兒期の名残りであつた遊戯本能が次第に退化して、知識慾が一層盛んとなり、學ぼうとする態度がいよいよ根強く張られて、雜誌やら、童話本やら手當り次第讀み耽るといふ著しい心の變化が現れて参りますと同時に、他方において衝動生活から意志生活へと入り込むところの、努力の態度も

現れて参ります爲に、一定の目的を定めて勉勵するといふ學びの生活が中心となり、遊びの生活がその副となつて参りますから、この頃の教育方針を、始めて「善く學び善く遊べ」といふモットーに換へるといふことは、最も自然な導き方であり、又子供の心理に適した方針であります。

そしてこの方針は、五・六年の高學年になつても、又はそれ以上の中等學校に進んでも常に變らないところの大方針でありますから、やゝもすれば多くの家庭で陥るところの、中等學校入學の準備教育の爲に、五・六年頃になると、急に詰込みに熱中して、子供の生活から遊びを奪つてしまひ、徹頭徹尾「善く學び善く學べ」で押通さうとするやり方は、家庭教育においても、はた又學校教育においても、決して褒めた方針ではありません。

良いたゞ 立派な子供を育て上げようとするれば、その幼兒の頃から、良い習慣をつけるやうに、その土臺を築いておかなければならないといふことは、前にも述べましたが、この立派な土臺の上、更に立派な建物を築き上げるところの時期が、この學童期であります



わち、この時期は、家庭教育上最も注意すべきであることの出発点である。大事な時期であります。幼  
 児の頃から作らされて来たところの、早起の習慣、自分のことは自分でやるといふことも、  
 清潔、整頓、謙遜など、何れもこの學童期において完成されるのであります。  
 これは子供の意志の発達の順序から見ても、最も習慣の作り易い時期でありまして、若  
 し不幸にして、この學童期において、買食ひとぬ、夜遊びとか、うろつきの癖とかから悪  
 い癖をつけてしまはますと、これを取去るのは非常に困難を感じます。中には、この時期  
 に養育上げられた悪い習慣が、とうとう抜け切らないで、だん／＼悪いことを覚えて、おし  
 まひには不良少年不良少女に墮落してしまふといふ悲しむべき運命に陥るものも少なくは  
 ないのであります。

でありますから、この學童期において、早くから困苦艱難に堪へ、これを切抜けて、正  
 しい目的に奮闘するといふ意志の習慣を築き上げておくことが、極めて大切なことであら  
 います。いはゆる立志精神の中の人々の成功の最大の原因が、その少年期において、**奮闘**と**艱**

ひ、**艱難**に打勝つて、**獨立**歩の氣象を養つて来たところに存するものであるといふこと  
 を知つたならば、われ／＼は學童期の子供の家庭教育の如何に重大であるかを痛感せすに  
 居られないであらませう。

**無理は禁物** 困苦艱難に堪へ忍ぶといつても、子供のからだや心の働きに負ひ切れない  
 やうな、無理な重荷を負はせるといふことは、勿論控へなければなりません。若し子供の  
 身心の働きの限度といふことを忘れて、無暗やたらにこれを苦しめるならば、子供は疲れ  
 切つて、再び起つことが出来ないやうになつてしまふのです。かやうな無謀な指導に陥ら  
 ないやうにする爲には、断えず、子供の心やからだの發達といふことに注意すると同時に、  
 その生れつきについても充分審査した上で、子供の力相應の負擔を與へるといふ方針で導  
 かなければなりません。

からだに無理をすれば、すぐ疲れるとか、へたばるとかいふ形で、外に現れて來ますか  
 ら、家庭でも學校でもこの方面の無理を子供に強ひるやうなことは、めつたにありません



けれども、心の方面の無理といふものは、すぐその場で、できめに現れて来るとは限らないものでありますから、やゝもすれば、親も教師も、それと気づかずは無理をして、後にはまうてから始めて、それと気がついて後悔するといふことが起り勝ちなものであります。その弊害の最も著しいものは、何といつても、中等學校入學準備の、いはゆる試験地獄であります。

かつて教育相談所で取扱つた試験地獄の惨ましい犠牲に夫のやうな實例があります。それは競争の激しい中學校を受験するについて、果してそれだけの生れつきがあるかどうかを判断してもらひたいと云つて来た二組の母子の例であります。いろいろ心理學的検査を施した結果、その一方は充分その中學校を受けられるだけの資格をもつて居りますけれども、他方はどうも生れつきが良くないので、ずむぶん無理だといふことが判りました。そこで彼は、私の診断の結果を、正直ありのままに話してやつたのであります。後になつて、優秀な子供の母親から夫のやうな事實を聞かされたのであります。

私の診断を受けて歸る途々、その無理だらうといはれた方の母親が、非常に憤慨して、きつとこの子を中學校に入れて見せると力み返つて居られたさうですが、それからといふもの、練習だ、練習だ、準備書だ、家庭教師だと、ありとあらゆる方法を盡して、その子供に前込んだお蔭で、とうとうその子供は、優秀な子供と共に、見ん事その中學校に入るこゝとが出来たさうであります。その時のその母親の得意や思ふべしであります。けれどもその喜びも取の間、入學後次第々に健康が勝れなくなり、時々學校を休むといふことになつて、とうとう一學期も終らないうちにその子供は肋膜炎を患つて學校を中止しなければならぬことになつたのであります。

この母親は、中學校に入れることだけに熱中して、入つてからどうなるかといふ先の先まで考へるだけの餘裕がないばかりでなく、子供の心とからだには、その生れつきによつて、一定の限りといふものがあるものだといふことを私から説明してやつても、それを受け容れるだけのゆとりさへもなかつたのであります。ほんとうに無理は藥物であるとい



ふことを、われ／＼はこの愚かな母親の實例から訓へられなければなりません。特色の童見 子供は小學校を卒へたならば、何でもかんでも中學校へ入れなければならぬといふ法はないのであつて、むしろ、その子供の生れつきに應じた進路のきめ方をすることが、一番子供の幸福になることであり、又世の中の爲になることであります。このことについては、第十五講及び第十六講において更に詳しくお話いたしますが、とにかく、小學校時代には、前にも述べたやうに、學童の特色が次第々々にはつきりと分れ始めて來るのでありますから、その特色を正しく觀察し、かつこれを記録しておいて、後々の學校選擇や、職業選擇の大事な參考にするといふことを、家庭として充分心がけて頂かなければなりません。

不買化の用心 今日家庭教育は勿論、學校教育でも、社會教育でも、一番手を焼いてゐるのは、少年少女の日一日と不良化して行くといふ問題でありまして、これは正に國家の重大問題であるといつてもいい程、年々歳々その數を増し、他の多くの親を、教師を、

ぞして當局者を慟まし續けてゐる悲しむべき事實であります。

かやうな不良少年少女の多くは、後に第十七講で詳しく述べますやうに、その生れつきにおいて、うつかりすると不良化し易いといふ心の缺點をもつてゐるものでありますけれども、然しその缺點といへども、家庭教育さへしつかりして居れば、充分正し得るものであります。こうしてみますと、かやうな不良兒を作るに至る最大の原因は、とりもなほさすその子の家庭教育の缺陷といふことに歸せしめなければならぬのであります。

然らば、不良兒を出さないやうにする爲には、各家庭は何歳頃の子供の教育について最も深い注意を拂はなければならぬかといふに、それは絶えず注意しなければならぬ問題ではありますけれども、特にその中でも、この學童期が一番大切な時期であるといふことが、次に示す私共の研究の結果が、最も雄辯に物語つて居ります。

私共が多数の犯罪少年について調査いたしました事柄の中で、特に、始めて不良な行ひをした年齢が何歳頃かといふ點に關する研究の要點だけを申し上げますと、最も多い犯罪は



やはり盗みでありまして、それは多く、幼い時からの買食ひの悪い癖から出發して、ついに金がない爲に、店先のお菓子なり、果物なりをかすめとるといふ恐しい犯罪を犯すにいたるものであります。

かやうな買食ひの癖が何時頃から始まつたかは、今になつてそれを精しく調べることは困難でありますけれども、他所の物を盗むやうになつた時の年齢は、充分調べることが出来ます。その調査の結果によりますと、百人に一人位の極く僅かの割合ではありますけれども、既に五歳でもつてかやうな恐しい盗みをやり始めたといふ不良少年があげられて居ります。六歳・七歳と年齢の進むに従つて、少しづゝその割合を増して行つて居ります。八歳になると急に多くなり、約九パーセントといふ割合を示し、其後ますます殖えて十一歳で十二パーセントとなり、十二歳では最も多く、約十五パーセントを示し、その後は次第に減つて行きます。

これで見ますと、十二歳の頃に始めて盗みがあれば出したといふ不良少年が最も多く、十一歳及び十三歳がこれに次ぎ、この十一歳から十三歳までの三年間だけで、全體の三十八パーセントを占めて居ります。そして十四歳から十八歳に至る五年間の合計が二十八パーセントに過ぎないのに對して、十歳以下の幼少な時期に盗み始めたといふ不良少年が、三十四パーセントの多きに達するといふことは、學童期といふ時代が、如何に不良少年を作り易い時代であるかといふことを雄辯に物語る事實であります。若しこれを十三歳以下と十四歳以上との二組に分けるならば、十三歳以下の學童期において、犯罪を犯し始めた者が、全體の不良少年少女の七十二パーセントを占めるといふことになり、従つて不良兒の大部分は、既に學童期において完成されてゐるものであるといふことになるのであります。然もこれは、現に犯罪を犯してしまつた時の年齢でありますから、かやうな恐しい罪を犯さないやうに、家庭教育の立場から、豫め注意しなければならぬ年齢といふのは、これよりも一年か二年早くなければならぬ筈であります。従つて學童の不良化を防止しやうといふ立場から、各家庭なり、學校なりが充分の注意を拂はなければならぬ年齢は、十歳頃







だけとか、所で聞くだけとかいふ學び方に偏しないやうに、出来るだけ實地について、生きた知識を得得せるといふ方針で、子供の勉強を指導するのが最も望ましい心がけであります。

好きなものの上手なれ 好きなものには誰でも心を引きつけられます。従つてそれに深く注意しますから、そのものをよく覚えることが出来るといふ譯であります。昔から「好きなものを上手なれ」といつてゐるのがそれであつて、子供の勉強を効果のあるやうに行はせようと思へば、やはりこの理をうまく利用しなければなりません。

本學校の二・三年といふ低学年では多くの場合、親なり、教師なりからかやうな面白みとか、興味といふものを起してもらふやうに仕向けられなければ、好きにならないのが普通でありまして、勉強すべきことがらを、好きにさせる爲には、それ相應の苦心をしなければなりません。例へばこの時期の子供に非常に喜ばれるところの童話を話して聞かせながら、子供等に話を聞くといふ態度を起させておいて、その興味に乗じて、修身のお話を

して聞かせるなども一つの方法でありませう。

ところが三・四年頃になると、意志の發達と相俟つて、子供等は、六ヶしいことを自分の努力でやりのけるとともに、一種の興味を感ずるといふことが、しばしば現れるやうになります。かうなると、親なり、教師なりが、特に子供に興味を起させるやうに仕組んでやらなくとも、子供等自身で、興味を見出して勉強して行くやうになります。かやうな傾向が、学年の進びに従つてますます多くなるものでありますから、努力の後に來る新しい興味を起させるやうに導くことも亦、大事な學習指導法の一つであります。

骨折のくたびれ儲け 好きなことはいくらやつても飽きないといふことは、よくあることでありますけれども、飽きないからといつて必ずしもその勉強の効果に變りがないとは限りません。それは、好き嫌ひとは別問題に、勉強しなへすれば、必ずそれだけの疲れが心に残るからであります。疲れが出て來ますと、長い時間をかけて骨折つても、それだけの効果があがらないものであります。かへつて疲れをどん／＼増すだけで、それこそ



骨折損のくたびれ儲けといふ結果になり終ることがあるのでありますから、その點をよく考へて子供の勉強を指導しなければなりません。この簡単な理窟を辨へない爲に、子供が長い時間机の前に坐つて居れば、それで澤山勉強が出来ると思込んでゐる親を、しばしば見受けるのでありますが、これなどは全く下手な勉強法の一つであります。

勉強の効果を出来るだけ多くしようと思へば、先づその學ぶべき材料の要點をつかむといふ勉強法を指導しなければなりません。材料によつては、初から終りまで、一字残らず皆覺えてしまはなければならぬといふものもありますけれども、多くの材料といふものはその要點を覺えさへすればそれで充分だといふ場合が多いものであります。さういふ時に、一から十まで皆覺えようとすれば、それだけ多くの勢力を使はなければならぬのでありますから、どうしても無駄骨を折るところが出て参ります。

同じやうなことが、全體を覺えなければならぬ材料についても出て参ります。それは、その全體の材料の中でも、覺え易いところと、覺えにくいところとあるのが普通でありま

ずから、その時に、先づ覺えにくいところだけを取り出して、そこを、他の部分よりも多く繰返すといふことにすれば、六ヶしいところを覺えてしまふまで、何遍も繰返すよりも、ずつと心の働きの經濟になるわけであります。

それから繰返すといふことについても、經濟的な繰返し方と、骨折損な反覆の仕方とがあるわけでありまして、例へば、同じ十回反覆するにしても、續けざまに十回反覆する場合と、五回反覆したならば、しばらく休んで、それから又五回反覆する場合とは、その勞力から見れば同じでありますけれども、その効果から見ればずるぶん違ふものであります。後の方の、分けて反覆する方がずつと能率のあがる勉強法になるものであります。

かやうにして出来るだけ、無駄骨を折らないやうな能率的な勉強法を選ぶことが、子供の心理に適した最も望ましい指導方法であります。

## 二 勉強の奨励法



褒賞 子供の勉強を奨励するのに最も多く用ひられる方法は、褒めること、叱ることです。ありますが、その中の褒め方について考へて見ますと、幼い時代には、お菓子とか、繪本とか、衣類とか、學用品とかいふ實際の品物を御褒美に與へて奨励するのが普通でありますけれども、これも度を過すと、御褒美をもらひたいから勉強するといふことになつて甚だ面白くない結果を來すことにもなるのでありますから、御褒美は餘り多きにすぎないやうに、そして次第々々に精神的な褒め方に移るやうにすることが望ましいものであります。

殊に劣等児に對しては、褒めるといふ褒賞の仕方が、著しく効果のあがるものであります。常日頃仲間からも、教師からも、あれは出来ないう子だと定評を與へられてゐたものが圖書とか、唱歌とかで、ちよつとした出来栄を示したやうな時、そこをつかまへて、褒めてやると、非常に元氣づいて、どん／＼その特色を伸ばすやうになるものであるといふ實例を、私はしばしば聞かされて居ります。

叱責 學校の成績が思ふやうに出来ないう爲に、これを向上させる目的で、親がしばしばその子供を叱つたり、責めたりすることがありますが、これも程度もので、餘り叱言が多すぎると、かへつて子供をいぢけさせたり、ひがませたりすることがありますから、餘程注意しなければなりません。私が書て取扱つた教育相談の實例の中にも、父親が、その子の勉強を奨励したい餘り、その子の成績の悪くなることを恐れて、絶えず「こんな成績でどうするか」「除く出来ないと學校を止めさせてしまふぞ」と叱つたり、おどしたりして、その子の勉強を責めてゐたが、かへつてその子の成績がますます悪くなるので、その姉が心配して相談に來たといふ例があります。私はこの時その父親の奨励法の見當違ひであることをよく話してやつたところ、それを傳へ聞いた父親が、今までの方法の悪かつたことを悟つて、その奨励法を全く改めた爲に、その子供も非常に朗かな氣持となり、勉強も非常によく出来るやうになつたといふことを、しばらくしてから、その姉から知らせてよこしたことがありました。



この實例でも解るやうに餘り叱りすぎるといふことは、決して子供の勉強法とならないばかりでなく、かへつて邪魔になることが多いのでありますから、そこをよく辨へて、古歌にあるやうに「可哀くば五つ教へて三つ褒め」の如く、可哀くば五つ教へて三つ褒め、又時々よく訓へ諭すといふ方針で、子供の勉強を奨励することが最も望ましいことでもあります。

（この文章は非常に淡く、ほとんど不可読な状態にある。内容は上記の文脈に一致すると思われるが、文字がほとんど判別できない。）

### 第十三講 氣質と性格

#### 一 氣質と性格の觀察法

四氣質 どんなに學問が出来ても、その人柄が充分練り鍛へられてゐなければ、ほんとうに立派な人間といふことが出来ないのでありますから、立派な子供を育て上げようと思へば、その勉強なり、學習なりの指導を充分に行ふと同時に、その性質の方面の指導といふことについて、一層深い注意を拂はなければなりません。

子供の性質の特色をさめるのに、最も大きな關係をもつものは、その子供の感情や意志の働きの土臺となるところの氣質といふものであります。これについては、今日の心理學の上でもいろいろ議論のあるところでありますが、今まで最も多く行はれて来た氣質の見方は、その感情の生れつきの働きかけた方から見た四つの區別でありまして、その第一は、



何かおかしなことでもあると、最先に笑ひ出すが、その笑ひたるや極めて上すべりで腹の底から笑ひ出すといふ強さをもたないところのあつさりした陽氣な氣質であつてかういふ氣質を多血質といつて居ります。

これと反對に、少し癪にさわることでもあると、すぐブリ／＼と怒り出して怒鳴りつけるが、何時の間にかさつきの怒りを忘れて機嫌がよくなつてしまふといふ、いはゞ夕立のやうな、俗にいふ雷爺といつた様な短氣な人間を膽汁質の氣質の人と名づけて居ります。

これと反對に、何か悲しいことでも起ると、そんな急に悲しみ出すといふことはないけれども、來し方、行く末を考へ合せては、じり／＼とその悲しみの感情を深めて行き、然も一旦悲しみ出したら、次から次へと悲しいことばかり思ひ出されて、何時までも／＼その悲しみの感情がつきまとつて心を離れないといふ、いはゞ執念深いそして陰氣な氣質の人間があらますが、かういふ氣質を神經質又は憂鬱質と名づけて居ります。

もう一つは何かおかしなことでもあつた時、皆が笑ひ終つた時に、はじめてウフ、と微

かに微笑む位であつて、喜怒哀樂の感情が、極めて淺く、然も現れにくいといふ、いはゞ落付いたどつしりした平氣な氣質であつて、これを粘液質と名づけて居ります。

右のやうな、多血質、膽汁質、神經質、粘液質の四つの氣質の中の、どの種類の特色を最も多く現すかといふことについては、永い間その子供の日常の行動についてよく觀察したら上できめなければなりません。

内向性・外向性 氣質といふ言葉は、人間の感情の働きの生れつきの特色について名づけた言葉でありますから、その働き方をどういふ點から見るといふことによつて、それ／＼その分け方なり、名づけ方なりが違つて來るわけであります。右に述べた四つの氣質は主として、感情の働き方の強さと、速さとの點から見た分け方であつて、感情の働き方が、速くて弱いものを多血質といひ、速くて強いものを膽汁質、遅くて強いものを神經質、遅くて弱いものを粘液質と名づけたものであります。今度はこれと違つた方面から、その感情が、自我とか、自分とか、内部とかの方面に向つて働きかけ易い生れつきの人と、



その反対に自分以外のものとか、外部とかに向つて働きかけ易い人との二つに分けることも出来るわけがあります。

この内部へと外部へと働き方によつて分けるところの考へ方は、最近心理学の方でも非常に重んぜられるやうになつた見方でありまして、前の方を内向型の氣質の人と名づけ、後の方を外向型の氣質と名づけて居ります。

もう少し詳しく述べるならば、内向型といふ方は、自分のことだけを深く考へて、他の人のことを餘り考へないとか、従つて獨りぼつちで居ることを好み、ひつとりやで、他人と交ることを餘り好まずそれよりも引込んで本でも讀んでゐた方がいゝといふ風に考へる人で、考へることが好きで、よくあれやこれやと考へすぎることが多い爲に、とかく決心がつきにくいとか、その代り、事を慎重に、かまへてやるとか、或は人から差圖をされることが嫌ひで、自分の思を通さうとし、氣むづかしやで、陰氣で、執念深く、その代り辛<sup>辛い</sup>く、物に凝る<sup>凝る</sup>性分があるといつたやうな性質の人間であつて、外向型といふ方は、丁

度これらの反対の性質の氣質であります。

性格 右のやうないろくの氣質が、その子供の感情の生れつきとして、親から遺し傳へられて來てゐるのでありますが、これが生れてから後のいろくの境遇や教育の力によつて、一定の特色をそなへたその子供の心の型なり、習慣なりといふものになつて参ります。押の強い人間だとか、なか／＼食へない人間だとか、圓滑な人間だとかいふ、その人／＼の根本の特色を示す一種の型といふものが出來て参ります。それをその人の性格と名づけるのであります。

性格といふ言葉は、最近の心理学においても非常にやかましくいはれるやうになつて参りましたが、まだはつきりと決つた解釋の仕方をもたないやうであります。従つて或る學者は、右に述べた内向型、外向型のやうなものも性格の一種であるといふやうにいつて居りますが、要するに、性格は、氣質といふ感情の生れつきが土臺となつて、いろ／＼の經驗の結果作り上げられたその人の一定の生活の態度であると私は解釋して居ります。



最近では、性格の型とか種類などについて、いろいろの議論の起るのは、結局學者が自分勝手な考へ方を基にして勝手に分けてゐるからで、これでは何時までたつても、性格とはこんなもので、こんな種類に分けられるものだといふ結論に達することが出来ないのだから、むしろ、もつと據り所のある、誰でもさうと認めずに居られないものを土臺にして分ける方がよいぢやないかといふ考から、性格の土臺をからだのいろいろの特色に求めるといふ研究の仕方が現れて参りました。例へばからだの格恰即ち體型といふものからして瘠型とか細長型とかに屬する體型の人間は、非社交的な、裏腹のある神經質な分裂性といふ性格に屬するとか、筋骨たくましい闘士型の體型をもつてゐる人間も、やはり分裂性の性格に屬するとか、肥満型の體型をもつた人間は、親切で、社交的で、あけつばなしで氣のよけない、その代りお天氣者な循環性の性格に屬するとかいふやうな新しい研究を試みる學者の現れて來たことなどもその一例であります。

その他、からだの中のいろいろの腺から分泌されるホルモンの特色によつて人の性格がまゝまるとか、更に最近に至つては、人間の血液にO・A・B・ABの四つの型があるといふ醫學上の意見を基にして、これと性格との間に密接な關係があるやうに思はれるといふ新しい學説が出て來るなど、からだと性格との關係の研究は、ますます盛んになつて参りました。

最後の血液型と性格との關係の研究は、我が國獨特の研究で、これには今、古川學士の學説と私の學説との二つが丁度對立してゐる形であります。何れもまだ假説の時代でありますから、今後私共の研究の進むに従つてこの問題がいろいろの新しい事實を物語るやうになることと思ひます。

私は右のやうな最新の研究を基礎にいたしましたして、私獨特の性格の分類法を學界に發表して居りますけれども、餘り煩雜になりますから、今後の機會に譲つて、こゝでは省略することいたします。

要するに、氣質や性格の問題は、目下、世界各國の心理學者が一生懸命になつて、各方



面から研究を續けてゐる最中でありますから、この問題に關する最後の解決は、こゝ數年乃至十數年を要することでありませう。私共も及ばずながら、その末席を汚しながら、私共獨特の研究方法で、この問題の解決の爲に精進しつゝあるものであります。

## 二 氣質と性格の教育

品性 氣質や性格は、その人の感情の生れつきとか、その働き方の習慣的となつた意志の傾きといふものであつて、いはゞその人の考へ方や、行ひ方の原動力となるところの力であります。いはゆる「善にも強し、惡にも強し」といふ時の、その「強し」といふのがその人の氣質とか性格とかいはれる方面であつて、善に向くのか、それとも惡に向くのかといふことは、その人の性格とは別な問題であります。

この原動力となる性格を、單に自然のあるがまゝの現れとして見ずに、それを善い目的の爲に働きかけるやうに導かうといふ立場から見ても、これを教育の目的として考へる場合

にはこの性格を又品性と名づけることがあります。でありますから、性格に對しては強いか弱いかいふ自然の力を表す言葉を用ひますけれども、品性に對しては、善いか惡いかといふ道徳的價值を云ひ表す言葉を用ひるやうになつて居ります。下等な品性とか下劣な品性などいふのも皆同じ見地から來るものであります。

若しその人の性格が、善い事を好み、惡い事を憎み、善い事を行ひ、惡い事を避けるといふことに働きかけるやうに習慣づけられてゐるならば、その人の品性は、高尚であり、又道徳的であると言はれるのであります。

人格 かやうな道徳的な品性のことを又人格と名づけて居りまして、人間を教育する目的は、最初にもお話ししましたやうに、獨立の社會生活を営むことの出來る人格を養ふことにあるのでありますから、この氣質や性格といふ子供の全體の心の働きの原動力となる働きを、絶えず善なる目的の方向に働きかけさせ、惡なる目的の方向には働きかけさせないやうにするといふ指導の仕方は、實に家庭教育の根本問題であると同時に、人間教育の究







でありまして、この他にまた、繪や歌を好き好むとか、級長になつて皆に褒められることを好むとか、お金を澤山貰ふことを好むとかいふやうに、子供の目的とするものゝ種類が澤山あるわけであります。

それらのいろいろの種類を幾つかの大まかな種類にまとめることが出来るわけでありまして、或はこれを三つに分けたり、六つに分けたり、それらの學者の立場によつて、その分け方にいろいろの違ひが出て参りますが、私は今までのいろいろの實驗的研究の結果から、興味の種類を次の七つに分類することを試みて居ります。

(1) 理論型

珍しいことを見たり聞いたりすることを非常に喜び、解らないことについて、徹底的に質問し、自分の考を確めるためにとか、或は研究心を満足させるために、いろいろの實驗を試みるなど、知識慾の旺盛な、そして筋の通らないことや、矛盾したことの嫌ひな、考へ深い、理窟を尊ぶところの態度。

(2) 經濟型

おいしい物を食べるとか、立派な着物を着るとか、お金を澤山ためるとか、その他何でも自分の物慾を満足させることに、強い執着をもつ、打算的な、そして所有慾の旺盛な、利に敏いところの態度。

(3) 權力型

負けず嫌ひで、威張りたがり、お山の大将氣取りで仲間を支配し統御することを好み、自分の威力を認められ、或は褒められることを非常に喜び、優越感にひたり、支配慾を満足させることに強い執着を有する態度。

(4) 審美型

音楽を聞いたり、繪を見たり、小説を読んだりすることを好み、又自分で歌つたり、弾いたり、描いたり、創作したりすることにも、強い興味を感じるといふやうに、美に憧れ、表現慾に富みかつ感受性の強い態度。



(5) 社会型

年少者をいたはり、友達の難儀を救ひ、己を棄て、他人のために盡すといつたやうな、親切で同情深く、犠牲的精神に富んだ態度。

(6) 宗教型

神様や佛様のお話を聞くことを喜び、神佛を尊び、お祈り禮拜などの敬虔な態度を自ら外に現さうとする態度。

(7)

活動型

遊びとしてゐるよりは、身體を動かし、運動競技などの身體的活動に勢力を費すことを最も喜ぶ態度。

以上のやうな態度を強く示すやうな、心の特色を有するものを、それ／＼右のやうな興味型の子供と見るものでありまして、かやうな興味型の何れに最も多く屬するかといふことを、實際的にさめるための我が國最初の標準検査法として完成したものが、拙著「家庭

で出来る心の診断尺度」第五章にある興味型テストであります。

興味の種類 この興味型テストを、幼稚園時代の幼児から、小学校時代の學童、中等學校時代の生徒に至る約六千名の兒童に適用した結果その發達の狀態に、頗る興味のある事實を發見することが出来たのであります。即ち、幼児期から學童期へ入ると、右の七つの興味の中の宗教的、社会的、理論的興味の三型において、非常に高い點數を表し、これに反して、經濟的及び權力的興味の點數が最も低く、活動的及び審美的興味の點數がその中間の位置を占めるといふ結果がそれでありまして、然もこの對立は、年齢の進むに従つてますます／＼はつきりして來るといふ事實も示されたのであります。

言ひ換へれば、子供が最も好むものとして、衷心から求めるところの目的は、初は物慾的なものであつたものが、次第々々に精神的な興味とか、價值とかを有するものに發達變化して行くものであるといふ、自然の發達順序を物語るものでありまして、これによつて一人々々の子供が、かゝる根本の要求において、果して普通一般の發達をとげてゐるかど



うかをも診断することが出来るわけでもあります。果して普通一環の検査をすれば、その結果も興味の種類、かやうな興味の特徴が、果して永続するものかどうかといふことに對して、今までかやうな精密な検査法が餘り發表されなかつた關係上、はつきりした結論が示されて居りませんけれども、私の研究の結果では、少くとも一ヶ年間は、大部分の子供が、前年に現した時と同じやうな特色を示すものであつて、殊に尋常四年以上の學童並に中等學校生並において、その永続性が最も著しいものであるといふ事實が證明されました。二年以上隔つたらどうなるかといふ研究は、今後それだけの年数がたなければ、私の研究結果が出て参りませんから、何とも結論されないうけであります。然し四年以上の學童において、著しくその永続性を現し始めたといふことは、この頃からの子供の興味の特徴をかやうな興味型テストによつて検査するなり、或は注意深い觀察を試みて、早くこれを發見し、その特色に應じて、將來の學校選擇なり、職業指導なりを行ふときの資料としなければならぬものであるといふことを物語るものであります。

## 二 理想的人間の種類

生活型式「かやうな興味の種類に現れたその子供の特色は、やがてその子供の理想とするところの、價值なり、目的なりは關係して來るものであります。一體人間が最も好むところのもの、或は最後の理想とするものは何であるかといふことについて、ドイツの教育學者シュアマンダーは、六つの種類をあげて居ります。即ち、真理を求めようとしてコック／＼研究してゐるところの學者の値れる「真」といふ價值と、財産を目當にせつせと働いてゐるところの實業家が値れる「用」とか「役立つ」といふ價值と、代議士なり、大臣なりを目當として頻りに奔走するところの政治家が値れる「權力」といふ價值と、立派な作品を目當として苦辛勞働してゐるところの藝術家が値れる「美」といふ價值と、世の爲人の爲、といふことを目當てとして、己を犠牲にしながも満足してゐるところの博愛慈善家が値れる「愛」といふ價值と、教員とか成佛とかを目當てとして神に祈るところ







## 第十五講 智能の新しい見方

### 一 優秀児・劣等児の新しい見方

偏知主義教育の餘弊 人間のほんとうの値打は、その人の品性の高下、理想・目的の如何によつて決めらるべき等でありませうけれども、かういふ心の奥底の方面に関する研究なり、観察なりが非常に面倒なところから、學校の入學考査なり、銀行、會社の人物考査なりといふものには、とかくその人間の學識、學歷といふ方面を偏重するといふ傾が見受けられます。これは過去の教育界なり、人間社會なりを支配してゐたところの、知識偏重の風潮とか、物識り教育の偏見とかによつて醸されてゐるところも、非常に大きいものでありまして、今かやうな不具な教育なり思潮なりといふものが、次第に消え失せて、もつと全體の生命を働かせるところの教育を施さなければならぬといふ風潮が、一世を風靡

するやうになりました。

然るに、人間の心の生れつきを検査しようとするところの精神検査法の發見は、まだこの新しい時代の要求に應ずるところが出來ず、偏知主義時代の、殊に物識り教育時代の餘弊をそのまま受け嗣いでゐるやうな感があります。それは、人間の賢さの生れつき即ち智能を検査する場合に、今から三十年も昔に考へられた、ビネー・テットの舊式に従つて、言葉を主とした智能検査法を重視し、このテストで立派な成績を示した子供を優秀児と名づけ、劣等な成績を示したものを劣等児と名づけるといふ方式を遵奉してゐるといふことであります。

勿論、言語を用ひる智能検査法は、子供の智能を診斷する上において、必要缺くべからざる最も重要な方法の一つであります。然しこれのみが唯一の形式であるとは限らず、他にもつとこれと併せ用ひなければならぬ重要な方法があるのではないかといふ疑問がしばしば起るのであります。



その證據には、今までのテストで劣等な成績を示した子供が、同様に學校の成績では悪い結果を示すけれども、さて卒業した後になつて、意外な成功をするといふ實例が續々として出て来るやうになつたのであります。これは、今までのテストの結果は、今までの學校成績を豫想することは充分出來たけれども、今までの學校成績で見落してゐたところの大事な子供の生れつきを今までのテストも亦見落してゐたといふことを物語るものであります。つまり、今までの教育は物識り教育でありましたから、極端にいへば頭の中に澤山詰込んでゐるへすれば、それで優等生なので、算術とか、讀方とか、地理、歴史とかいつたやうな、主として言葉を仲介として習得されるやうな、いはゆる知識學科といふものを覚えさへすれば充分であつたので、圖書とか、手工とか、裁縫とかいふ、いはゆる技能學科などいふものは、てんで問題にならなかつたのであります。

智能三方向説 かやうな偏知主義、物識り主義の教育に偏されて、永い間見通されて來た、いはゆる劣等見の中に恵まれてゐる新しい賢さを何如にして發見すべきかといふこと

が、これからの家庭教育並に學校教育の大きな問題であります。このことは次の、劣等見と折紙のけられた子供が非常な成功をしたといふ實例の説明において、一層明かにされるのであります。とにかく賢さの生れつきといふものを、唯一方面だけに見るといふことは片手落の見方であるといふことだけは、私のこれまでの、いろいろの實驗的研究の結果からも、明かに結論されるところであります。

然らば、どういふ見方が一番合理的であるかと申し上げますと、私の今までの實驗的研究の結果と、教育相談の經驗と、世間的成功の實例とから推して、いはゆる智能三方向説が最も合理的でかつ最も實際的効果的な見方であると信するものであります。この新しい學説は、我が國では私以外に極く少數の學者が主張しかけてゐるにすぎないものでありますから、多くの人々にとつては耳新しいことと思はれますので、その要點をお話することにいたします。この學説は、その源をアメリカの心理學者に發してゐるものであります。それを土臺としていろいろ研究した結果、私の考へを可成り多分に含ませて私自身の學説と



して作りかへたものであります。智能といふものは、學習する動きの土臺となる生れつきであります。學習するといふことは、この世の中にあるものと心の中に採入れるとか、そのものと吾々の心との關係をつけるといふことに他ならないのでありますから、この世の中にあるものをどういふ種類に分けるかによつて、その學習の種類がさまざま、従つて又その學習の土臺をなすところの智能の種類もさまざまであります。然るにこの世の中にあるものは、物か、心か、その二つの合したもののかの三つのうち何れかのもの、又はその變化としてあるだけであります。物としてあるものは、勿論、空氣とか水とか草とかいふ自然物であり、その變化としてあるものは、風とか雨とかいふ自然現象なり或は成長といふ現象であり、心は吾々の内部の變化たる精神現象であり、物と心との合體は、われわれの身體と精神であつて之は雜すことの出来ない一體の生命であり人間であります。従つて學習の對象となるものは、自然物又は自然現象か、精神現象そのものか、人間そのものかの三つの種類に分けられる筈で

あります。然るにこの自然物を取扱ふところの學習はその物を扱ふといふ點において、それを見るとか、聞くとか、いぢくるとかいふ感覺や運動の動きを常に必要とする爲に、實體を具へた物とか、具體的なものとかの學習になり、殊にそれを取扱ふといふことになる、手際とか技術とかを必要とするところの學習になります。そこでこの種の學習を具體的な學習とか、技術的學習といひ、従つてかやうな學習の土臺となる智能を、具體的智能又は技術的智能と名づけるのであります。次に精神現象を學ぶといふ動きは、右のやうな感覺とか運動とかいふ、具體的なもの、動きを必要とせず、頭の中だけで、形も何もないことを考へて居ればよいのであつて、例へば哲學者が深く考へ込みながら、いろいろの眞理を考へ出して行くなどいふのがそれであり、かやうに形の無い、頭の中だけの學習をするといふ意味からこれを抽象的學習と名づけ、その土臺となる智能を抽象的智能と名づけるのであります。



第三の人を學ぶといふことは、人の表情、動作等からして、その裏面の心を読み取つたりする學習であつて、これは、人と人との社會的關係をうまく治めて行く爲に必要な學習でありますから、社會的學習と名づけ、その土臺になる智能を社會的智能といふのであります。

その他いろいろの六ヶしい説明もありますが、以上が私の考を基にして建て直した智能三方向説の概要であります。かやうな學説の説明はどうであらうと、吾々が實際の家庭教育又は學校教育の上で必要なものは、その新しい學説の實用性といふことであります。

右の學説に基いて私は、三種の智能テストを使用しなければ、ほんどうに子供の智能を知ることが出来ない」と主張して居ります。そのうちの抽象的智能は、今までのビネー・テストその他の殆んど大部分のテストによつて検査されますが、技術的智能検査法は、我が國においては、私の立方體構圖テストといふ標準テストが一種類あるだけで、他に學問的

な手續を経て確立された標準のテストが出来て居りません。社會的智能テストは私が目下製作中で、他にまだ一つも現れて居りません。アメリカでは既に出来て、實用に供せられて居ります。

かやうな實際的検査法が具備されるやうになつた以上、以上の學説は、既にその實用性の過半を實現し得たものと見てよろしいであります。次にその實際適用の効果如何といふ問題であります。この點については、私も多年の教育相談における學校選擇、及び職業指導において、非常な効果を収めて居りますから、今後この方法を更に改良して行つたならば、學校における教育指導でも、職業指導でも、非常な便益を受けるやうになるだらうと思はれます。

これらの新しい研究と實施との結果から、先づ第一に考へられることは、從來の優秀兒、劣等兒の見方に對して大改革を加へなければならぬだらうといふことであります。即ち今までの優秀兒、劣等兒といふものは、その程度を判定する學科の方面から見れば、偏知



主義時代の名義であるところの、知識學科といふ點だけでもつてこれを判定しようとし、智能検査法の側から見れば、従来の抽象的知能テストだけで判定しようとするなど、何れにしても、児童の一面しか見えないところの片手落ちな判定法で判定したものであるといひ得べく、従つて、「知識學科又は抽象的知能の方面から見れば」といふ條件で、優秀兒とか低能兒とかいつてゐるのであつて、決して全體的に優秀兒とか劣等兒とかと判定してゐるのではないといふことにはなるのであります。

従つて従来の判定で劣等兒だといはれた子供でも、今一つの技術的知能テストをやつてみると、その方の智能に於いては、かへつて優秀兒であるといふ實例に出會ふことがしばしば起るのであります。そして今まで劣等兒々々と呼ばれて来たものが、こゝに新しい自分の特色を見出してもらつて、その劣等兒が非常な發奮をしたといふ實例も経験して居ります。

若し又第二の技術的知能も劣つてゐたからといつて、それでも未だ棄つたものではあり

ません。それは第三の社會的知能に於いて相當の發達を示してゐるならば、人を取扱ふ職業に於いては一人前の成功をなし得るからであります。

このやうにして三拍子揃つて皆劣等である時、始めてその子供はほんとうに劣等兒なのだと断定してもよろしい。けれ共さういふ子供は又からだの方の勢動に従事させるといふ道もあるのですから、とにかく従来のやうな或る一種だけの智能検査として、それで子供の智能の優劣が決つたと早合點することは、非常に不親切な態度であつて、決してその子供を生かす所由ではありませんから、親も教師も、一應この新しい智能三方向説と、そして新しい優劣の見方といふことに對して、充分の關心と期待とをかけられることを切望して止まぬものであります。

## 二 劣等兒が成功した實例

優等兒といはれたエマソン以上の學識と裏書するやうな實例がいろいろの方面からあ



げられるのでありますが、その最も著しい例の一つは、世界の發明王といはれたエジソンの實例であります。エジソンは人も知る如く、小學校入學後僅か三月餘りで退學させられた人であります。勿論それはその當時の學校教育の標準から見ても殆んど低能兒に等しいやうな出来なない子供であつたからであります。エジソンの幼なかつた時代には、物識り教育の最も盛んな時代であつて、我が國でいへば、論語とか源氏物語といつたやうな六ヶしい大音の言葉を譯山詰込んで、それを覚えて居ればそれで優等生といふ時代でありましたから、それこそ前に述べた頭の中ではかりで考へたり覚え込んだりすることに働きかける方の、抽象的的智能だけが中心になつて、その他の賢さなんといふものは殆んど問題にならなかつた時代であります。かやうな教育主義の時代の學校において受持の先生に、お前は低能兒だから學校を止めろといはれたエジソンは、果してほんとうの低能兒であつたでせうか。エジソンの母親が、この子は決して低能兒でないといふことを信するに至つたことの一つとして、エジソンは幼い時にいろいろの實驗をすることを非常に好んだといふ特色を

見出して居りますが、これなどは自然物とか自然現象とかを學んで行くのに役立つ、技術的の智能の優れてゐたことを物語る一つの現れではなかつたかと私は思ひます。そして彼のその後の發明、發見といふことは、殆んど皆自然物を取扱ふところの、技術的な方面の發見であつて、哲學とか數學とかいふ抽象的な知識の開發といふことに對しては、殆んど何等の貢獻をなしてゐないばかりか、あれ程の偉大なる人物でありながら、哲學その他の精神科學を、無用の長物であるとひどくけなししてゐること、あれだけの天才でありながら、數學に對しては至つて不得手で、少し六ヶしい計算になると皆これを助手にやらせたといふ事實とを考へ合せて見ますと、どうもエジソンは、抽象的的智能においては、小學校で低能兒と評紙つけられる程であつて、餘り秀で、はななかつたけれども、その代り學校教育では見出し得なかつたところの、技術的の智能に對しては非常な天分を恵まれてゐたものであると解釋することが、最も合理的なやうに私には思はれます。

劣等生が發明家、これはすぐ手近で私が直接聞いた實例であります。或る中學校の



五年の生徒で、學校の成績が餘り出来ない、いはゆる劣等生の部類に属する子供でありましたが、丁度先般我が國でもやうやく偏知主義の教育の非を悟り始めて、その弊害の一番多かつた中學校に對して、作業科といふものを設けることになりましたので、その劣等生は手工科を志望することになりました。ところがその劣等生は、手工室へ入ると非常な意氣込みで、ゴック／＼何かしら作り上げることに専念してゐるのであります。かやうな生活が一學期も続いた後は、彼はとう／＼一つの器械を發明し、然もそれが立派に特許まで與へられるに至つたのであります。一度かやうな立派な發明をするやうになつて、今まで永い學校生活の間暗みつけられてゐたその天分が芽を吹き出すと、今度は次から次へと、新しい發明が行はれるやうになつて参りました。そこで中學校の先生方も劣等生つて馬鹿にならないものだといふ嘆息を放たれたわけでもあります。

これらの實例から見ましても、今までの學校で劣等生だとか、低能兒だとかいつてゐる子供等に對して、もつと／＼新しい眼を見開いて、見直さなければならぬものであると

いふ私の主張の趣旨が、充分了解されたこと、思ひます。

劣等兒が模範車掌。もう一つの實例は、知識學科も、技能學科も皆駄目で、それこそ正真正正の劣等兒だと思つてゐたものが、豈計らんや、卒業後數年ならずして、模範車掌になつたといふ例でありまして、やはりその生徒を實際取扱つた小學校の校長さんのお話であります。その子供は或る町の高等小學校を一番ビリで押出されて行つたが、家の都合でどこかに勤めなければならぬことになつたので、或る店の小僧に雇はれることになりました。ところが根が劣等兒でありますから、釣銭の勘定はしば／＼間違へる。仕事をさせても手が不器用といふので、とう／＼その店を出されてしまひました。それから或る市の電車の車掌を志願しましたところ、學力劣等で見ん事落第。その後再募集が出たので、今度は或る方面から運動してもらつて、やつと合格することが出来たのであります。ところが採用されて見ると、お客の取扱ひから、仲間との折合、それに上役からのお覺えも極めて上々、非常に重寶がられてとん／＼拍子で昇進。とう／＼模範車掌に選ばれ、車掌監



書にまであげられて、多くの部下を極めて上手に統制し、人望いやが上に高いといふ今日の成績を見るに至つたといふ話であります。そして今では同じ學級の二、三番といふところの友達が、苦心奮闘の苦難勉強をしてやつと師範學校に入り、五年間も學費をかけて卒業して来たのに比べて、そのピリで卒業の車掌さんの方が、遙かに多い収入を得るに至つたといふので、校長さんも人の成功といふものは、なか／＼小學校時代の成績では判らないものだといふ遺憾として居られたのであります。

頭も悪く、手も不器用、それでわれ／＼はその子供をほんとうの劣等兒と断定してよいのであせうか、私は決してさうとは思ひません。第三の社會的智能がまだ残されてゐるかも知れないからであります。ピリの卒業から模範車掌に昇進したこの劣等兒には、人を理解し、仲間を融合させるといふやうな、社會的交渉の取扱ひにおいて、特別の才能、手腕を發揮するところが天分を盡されてゐたのではないかと思はれます。

### 三 劣等兒の導き方の決り方

得手を探せ 右の實例から見ましても、劣等兒の指導については、親も、教師も、ずいぶん氣をつけねばならぬ問題が澤山あること、思はれますが、その中でも特に、何でもいゝからその子の得手を探し出して、それを伸ばしてやるといふ態度を、絶えず忘れないやうにすることが、最も大切なやうに思はれます。

さやうな得手は、私共のやつて居りますやうな特別の検査法で發見することもありません。又ちよつとした機會から、それを發見することもありません。何れにしても、子供の特色を見出して、それに應じた導き方をするといふことは、教育の根本態度でありますけれども、今までの教育が、餘りに劣等兒と一面的にはかり見てそれで他を皆おつかぶせてしまふといふ嫌ひが多かつたことに對して、特にこの一事を注意して頂きたいものであります。



自尊心 お前は馬鹿だ、低能兒だといはれると、子供等は、それでもつて全部の心の働きを萎縮させてしまつて、折角働いて来るべき筈の働きまで現れなくなつてしまひます。即ち自分ももう駄目なものだといふ劣等感に襲はれてしまふのであります。

この際、唯一つでもいゝから、お前はこつちの方が相當出来るから、これをやれといつて相當の自尊心を持たせるといふことが、特に常日頃仲間者に馬鹿にされてゐる劣等兒の萎んだ心を引き立て、行く上において最も大切な心がけであるといはなければなりません。

### 三、劣等兒の養育

## 第十六講 將來の方針の決め方

### 一 學校選擇

幼少の推移と子供の將來 小學校の上級になりますと、そろ／＼家庭でも、學校でも、その子の將來の方針について思ひ悩むやうになつて参ります。どんな學校を選んだらよいか、どんな職業に進ませたらよいかといつて、われ／＼の心理學的診斷を求める爲に、教育相談所に押かけて来るのも、五年の終頃から六年の中頃にかけてが一番多いやうであります。

この問題は、その子の一生を支配することにもなる大事な問題でありますから、餘程慎重に行はねばなりません。たゞ漫然と、中學校へでも入れておいたなら、そのうちに何とかなるだらうといつたやうな、無責任な、でも入學をさせて、後で後悔したといふ實例を



私は澤山且せつゆらばで居ります。この問題をさめまについて先づ考へなければならぬことは、時勢の動きといふことでもあります。戦の時代には、大學を出さへすれば立派に成功が出来たから、子供も大學を卒業させるやうに先づ中學校からといふ選び方は、必ずしも成功するとは限りません。今日の世界の中は決して、さやうな學歷だけで立つて行ける世の中ではなく、もつと／＼實力といふものを重要視する時代となつて來てゐるといふことに気がつくならば、必ずしも大學を卒業させなくとも、もつと手取り早く實力をつけて、實際社會に送り出すといふ道も考へられるであらうませう。

學校の種類と子供の能力 かやうに、一方においては、子供が卒業する頃の世の中の有様にまで眼を通し、考へを練つてみて、その子供の將來の方針をさめる時の一つの参考とするといふにも、他方においては、その子供の長所短所を深く考へ、その子の希望と、家庭の資力とを考へ合せた上で、最後の方針を決めるといふ慎重な態度をとることが必要であらうませう。

子供の能力については、既に述べましたやうに、特にその智能の三つの方向の特色に應じて主として知的學習を重んずる中學校に對しては、その土臺となる抽象的智能の發達の程度を考慮し、主として技術的學習を重んずるところの、工業學校、工藝學校に對しては、その土臺となる技術的智能の發達程度を考慮するといふことなどは極めて大切な見地の一つであります。

その他、商業、農業、美術、音樂等の學校を選択するにしても、皆それ／＼、検査の結果又は、日頃の觀察の結果、子供の興味、希望等を參照して決定すべきものであります。總じて學校の選擇は、或る程度まで將來の職業の選擇と相通するところがあるものですから、次の職業選擇の項と併せて考へて慎重に行はなければなりません。

## 二 職業選擇



職業の種類と性能 世の中には何萬といふ職業の種類がありまして、それらの職業に成功する爲には、その職業を成しとげて行く爲に必要な、いろいろの性質、能力といふものが必要であります。そこでどんな職業にはどんな性能が必要なのかといふことについて、最近職業心理学の方でいろいろ研究されて居りますが、何分にも数の多いことでもありますから一々の職業について、皆その性能を實驗的にきめるといふことは、容易のことではありません。従つてこれこれの職業については、大體こんな性能が必要だらうといふことを、心理學者が考へて決めるといふ程にしか進んで居りません。

今日比較的明瞭にされて居ります方面は、智能の程度によつて、職業の種類を分けるといふ方法でありまして、學者、教師、政治家、藝術家といふやうな、非常に優秀な智能をもつた人でなければ充分成功出来ないやうな程度の職業を高等専門職業と名づけ、銀行會社員、電信技手、商人等の普通の智能の程度で成功出来るやうな職業を中等職業と名づけ、多少劣つた智能をもつてゐても、少し練習すれば成功出来るといつたやうな程度の各種の

職工のやうな職業を半熟練職業と名づけ、全く智能を要しない、いはゞ劣等者でも低能者でも出来るやうな程度の労働職業を、非熟練職業と名づけて居りまして、これらの職業に適するか否かは、それ／＼の智能テストで検査すればすぐ判ることでありまして、この方面の判定は比較的簡單であります。次に智能の程度だけでなしに、その種類から見た職業の分け方をしようといふ新しい研究が、ドイツの職業心理學者の間から起つて來て居ります。それは觀念とか心とかを相手とするところの職業と、物を相手とする職業と、人を相手とするところの職業との三大別でありまして、丁度私が前に主要いたしました智能三方向説とびつたり合ふところの考へ方なのであります。例へば高等専門職業の中でも、觀念を相手とする職業は、哲學者、數學者のやうな考へることを主とする職業でもつて、物を相手とする職業は、技師とか、彫刻家とか、自然科學者とかであり、人を相手とするものは、裁判官、辯護士、教師などであるといふのであります。



この三つの分け方は、中等職業以下の職業にも當てはめることが出来るのでありますから、今後の研究や指導の爲に、非常に大観を考へ方であると信じます。

その他氣質とか、性格とかいふ方面からも分けられるのでありますが、その方面の研究はまだ充分行はれて居りませんから、こゝには省略することにいたします。

性能に關係して特に考へなければならぬ問題は、不適性といふことであります。例へば色を取扱ふ職業に對しては、色盲のある人は不適性者であり、音を取扱ふ職業に耳の遠い人は向かないといつたやうに、その職業に必要な性能において欠陥をもつてゐるものは、不適性をもつてゐるといはれるのであります。

適材適所にそこで職業の選擇にあつては、自分の不適性と適性とを豫め心得ておいて然る後、その不適性の職を避け、適性の職業を選ぶといふ方針で進まなければなりません。これがいはゆる適材を適所に置くといふ、職業選擇上の大原則なのであります。

何故がやむを得ずとらなければならぬかと申しますと、自分の性能に適しない職業

を選びますと、その職業が必要とするところの或る性能を、一生懸命努力して練習發達せしめなければならぬことになりすから、その爲に非常な努力を費すばかりでなく、そんなに努力してもそれでも尙到底充分その職業に堪へて行くことが出来ないといふことを自ら發見するとか、或は適性をもつてゐる人が、餘り努力しないでもすらくとやつてのけられるのに、自分だけがどんなに努力しても、何時でも他の人に劣るといふことが判つて來て、次第にやけくそになり、つひにはその職業にわたらなくなるといふことになるからであります。

一度就いた職業を離れてしまふといふことは、今日の世の中においては、いろいろの點で非常に不利な立場におかれてしまふものであります。なか／＼職にありつけなくなりますし、幸にして職にありついたのでしても、前の職業で練習した性能が、今度の職業に對して何等の役に立たないばかりか、かへつて前のその習慣を壊して新しい習慣をつくるのに邪魔になることさへあるのでありますから、心の經濟といふ點から考へましても、非常に



損になります。でもまずから、職業を選ぶ時には極めて慎重に、そして一旦選んでその職に就いたならば、どこまでもそれをやり遂げるといふ態度を子供のうちに充分養つておかなければなりません。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）

### 第十七講 異常児の心理と家庭教育

#### 一 低能児の心理と家庭教育

早期発見 すべて普通の子供と違つたところのある、いはゆる異常児といふものは、早くから何處かにその缺點を現すものでありますから、出来るだけ早くそれを発見して、出来るだけ早くその指導方法を講ずるといふ方針で進むならば、低能児でも、不良児でも、**豊児**でも、相當のところまでこれを伸ばすことが出来るものといふ確信を、私は多くの實驗的研究と、實際的指導との経験から力強く主張することが出来ます。

特別指導 異常児といふものは、多くの場合、その心やからだの發達の程度が、一般の子供よりも遅れて居り、その伸び方も亦従つて遅いといふことを特色とするもので、いはば程度の違ひに過ぎず、全く違つた種類のものであるといふことではないのでありますか



ら。その遅れてゐるところを、特別の骨折でそれを徐々に導いて行くといふことが、何よりの指導法であります。普通の子供が一度で覺えることでも、智能の異常な低能兒ですと三度も五度も繰返して教へなければ覺えないといふのが當り前でもありますから、とにかく、親切に、根氣よく、丁寧に特別な指導をするといふことが、何よりも大切な態度であります。

低能兒は、劣等兒の更に程度の甚だしいものでありますから、その指導方法については、前の劣等兒のところでも述べたと同じやうなことが、こゝでも適用されるのであります。即ち少しでも残されてゐるところの特色を發見して、そこに自尊心をもたせながら特別の指導をするといふのがそれです。

治療教育 低能兒には、往々にしていろいろの疾病をもつてゐる爲に、智能の缺陷を一層甚だしくするものがありますから、この點について特別な注意を拂ひ、先づその疾病を發見し、それを治療し、然る後充分な教育を加へるといふ方針で導かなければなりません。

例へば先天梅毒だとか、著しい肝臓の障害だとか、全身の發育不良だとかいふものもその一種であり、その他に病氣といふわけでもありませんが、鼻と喉との間に出来るアデノイドといふ特別な腫のため、智能の働きを鈍らせるといふこともあるのでありますから、かやうな身體上の異常を出来るだけ早く發見してそれを治療するといふことが極めて大切なことでもあります。

要するに低能兒は、充分な治療と、熱心な、そして根氣強い教育愛とを注いで、特別の指導をするならば、相當のところまで導くことが出来るものであります。その實際の指導法などについても、今後機會をみてつとゞ詳しくお話ししたいと思います。

## 二 不良兒の心理と家庭教育

不良兒の大部分は劣等兒 不良少年少女の大部分は、その實さの生れつきにおいて非常に劣つてゐるものであるといふことを前にも述べましたが、實際私が多數の不良兒につい



て、私の智能検査法を適用してみた結果に鑑みましても、その八十八パーセントまでは劣等兒乃至低能兒であります。

智能が劣つてゐる爲に、その行動は多く理性によつて統御されないところの、衝動的な動作となり、食べたいと思へば、前後の考もなしに、すぐ手を出し、欲しいと思へば、他人のものであつても何んでも手をつけるといふことになるのであります。若しこの時、他人のものへ手をつけてはいけぬものだといふやうな、訓へ方をその都度與へてくれるやうな家庭なり、環境なりがあるならば、練習の効で、次第々々にさういふ悪い行ひがなくなるのであります。不良少年を生む多くの家庭といふものは、この點において非常に欠けてゐる爲に彼等は、善いとか、悪いとかいふことを考へる暇なしに、何時の間にか、さういふ悪い習慣をつけてしまふものであります。

従つて、不良兒の出来る一つの順序を簡單にまとめるならば、智能が劣る爲に、その行動が衝動的となり、然もその行動を導く適當な環境が與へられてゐない爲に、知らず／＼

の間に良くない行ひをして、それがつひに習慣となるものであるといつてよろしいであらうませう。

意志薄弱 智能が劣ると、多くの場合、いろ／＼のことを考へ合せるだけの働きが出て来ない爲に、右のやうに衝動的な行ひをするやうになるのであります。中には、智能は相當發達してゐても、それを打消すやうな、もつと／＼強い我がまゝな感情が幼い時から働きかけ易いやうに習慣づけられてゐる爲に、やはり衝動的な行ひをするといふ不良兒も出て参ります。これなどは小さい時から、遊びたいのを止めても親の言ひつけを守るとか、自分のことは自分ですとかいふ意志の働きの習慣をつけてゐなかつた爲に、いはゆる意志薄弱に陥つて、自分の意志で、自分のむら氣とか、慾望とか、衝動とかを抑へつけることが出来なくなつたところの子供でありまして、餘りに甘やかして、我がまゝの仕放題に育て、来た上流の家庭などに、よく現れるものであります。

かやうな意志の弱い子供は、どうしても、しつかりした自分の主義なり、方針なりとい



よものを定めるときも出陣す又それを定めたところで實行することもある六ヶしいのでありま  
 すから、勢ひ誘導にかつり易く、何時の間に不良少年の仲間に入り込まれてしまふと  
 いふことが、しばしば起るのであります。  
 悪友誘導、たとへ智能が低く、かの意志が薄弱であつたにしても、その環境が良く出来  
 ておはへすれば、子供はなかり不良少年になるといふことばないものでありますけれども、  
 多くの不良少年の育つて来た環境を調べてみますと、その家庭にしても、近隣の状態にして  
 も、甚だいかとはしいものが多いのであります。  
 先づ家庭について見ますと、片親が欠けてゐるとか、両親とも欠けてゐるとか、いふ子供  
 が相當多く、揃つてゐても夫婦の不和、殆んど家庭を空け通してあるとか、かりに居つた  
 とあつても、家庭の教育といふことば對しては全く無關心で、子供を野放し同様に放任し、  
 悪い遊びを覺えようが、悪い友達に引つかうが、そんなこととんでおかまひなしとい  
 ふ無責任な親であるといふ場合が、ずいぶん多いのであります。

又あつた遊びやもの態度といふことばまでは行かないまでも、子供の指導といふことをた  
 だしに校外無闇で、無監督に遊ばせられるといふ現象はよく見受けるのであります。が、  
 中には遊ばせられたやうな、奥の奥間を育ち上りやうと思へば、五つ割へて三つ養ひ、二つ  
 死んで良か入にするといふ氣持で、若し子供が遊んで悪いことをしたやうな時などでも、  
 又は罰金を出して置くといふ態度を持つべきであります。ところが、やゝもすると親の方が  
 かつとをめて怒り出し、たとへばおどろきやうな時といふことがよくあるのであります。  
 いかつて親が取扱ひました十二歳の不良少女に、かういふ實例があります。例によつて少  
 さい時かちつちられた賣女ひの習慣がせつなく知じて、とうとう近所の店先でかつ拂ひを  
 する、他所の家へ遊び込んで金を盗み出すといふおわけて、幾度か警察へもあげられると  
 かつ名代の不良少女。とうとう親もあつて除して、刑とあつてこの子を感化院に入れてもら  
 へてせめて近所への顔面討の位にしようと思つたといふ念願から、方面委員に頼んで、い  
 づれ感化院に入れてもらふ手續を遂げ、先づその第一の期断に精神鑑別所を勤めて来た



わけでありませう。そこで早速いろいろの精神検査を施して見ましたところ、智能その他の精神の發達は相當進んで居りまして、鑑別所へ来る子供としては、むしろ珍らしい位出来た子供であります。たゞその氣質の方面で、非常に勝氣な、向ふ見すのところがあるといふことが判明いたしましたので、私も事によつたらこの少女は、感化院に入れるまでもなく、その家庭で充分矯正することが出来るのではないかといふ豫想がつかしました。そこで先づ第一にその母親に、この少女の右のやうな氣質をうまく指導して行ける資格があるかどうかを調べてみることにいたしました。ところが、さすがに名代の不良少女を育て上げた母親だけあつて、その氣質は、その娘そのまんまの生寫し。その子が外で何か悪いことをして来たといふことでも判ると、娘の顔を見るなり、ガミ／＼云つて怒鳴りつけるといふ有様。さうするとその娘も負けない氣になつてその母に食つてかゝり、それこそ火に火を加へるやうな激情の争闘が行はれるのであります。それをその母は、「この子は我が子でありながら、まるで仇のやうだ」と批評し、「だから親のいふことをちつともきかない」

と結論してゐるのであります。

この母がその子を叱りさへすれば直せるのだと思つて来たことが第一の失敗であり、叱られてゐる時の娘の氣持がどんなものであるか、果して母親の怒鳴りつけながら云つて聞かせることを、教訓として聞きとるだけの、心のゆとりを持つてゐるかどうかを知ることが出来なかつたといふことが第二の失敗であります。

そこで私は、その母と娘とを別々に呼んで、よくその道理を説いて聞かせた上で、母親には先づ叱る前に、自分の方が足りないばかりにかういふ子供が出来たのだ、何とかして自分の力で直してやりたいといふ、懺悔と祈りの氣持でその怒りを殺し、自分の氣持の鎮まつた時、諒々としてその子に説いて聞かせることがほんとうの教育であるといふことを授け、その娘には、今日の検査の結果、必ず立派な人になるだけの生れつきを持つてゐることが判つたのだから、これから一生懸命努力して、一日も早く心の病を直し、皆に褒められるやうな立派な人になりませう、さつとそれが出来るといふ強い暗示を與へて、母



と子の強い決心を促しました。……  
 幸に母も子の強固の誠意に動かされてか、涙を流して「さうと書かします」「さうと書くを  
 します」と誓つてくねましたので、今日は何でもかんでも感化院に入れてもらはなければ  
 二度と我が家に歸れないといつて、意氣込んで来た母も、あきらめたけれど、私にも、  
 まつとこの子は母の方で直せるといふ希望がつかまりました。若面委員にもよく話をして、  
 今日はこの感化院を通じませんが、その代り、今度一度でも悪いことをしたら、無條件でこ  
 うを逐しますから、今日は引續して下さいと告げました。その後の娘は、自分の努力と母  
 の力によつてとうとう一度も悪いことをせずには済むことが出来たのであります。

この實情から推察しても、暗い夜に叱る飛ぶといふことは、決して子供を善に導  
 く所法ではないといふことが判るであります。我が子を責める時は、先づ我が身を責め  
 らなければなりません。そしてたい真心をもつて、子供に語りかけなければなりません。子供が如何  
 に人の誠意に動かされるものであるかといふこと、理解のない家庭といふものが、如何

にその子と親戚に逢ひものであるかといふことを物語る實情として、尤にもう一つの感化  
 院を話したしませう。

それはある女學校の二年生で、小さい時から我がまの仕度懸に育て上げられて来た活  
 動派の不貞少女の娘であります。この少女は早く父親を亡くして、母親の手で育つて来た  
 のであります。その母は教育といふことに熱して何等の理解もなく、子供の云ふがま  
 には、小遣を與へては活版屋にもや、買食ひもさせて居つたのであります。そのう  
 ちに金の使ひ方が非常に荒くなり、母から動員小遣だけでは、とても間に合はなくな  
 つて来たため、何時の間にか親の貯金から、こづきを引出すことを覚え、ついに活版  
 屋の貯金がなくなる、一人で近所の宿屋に泊つて来るといふ大膽な娘になつてし  
 まつたのであります。かうなると、母もあきらめ、母がなげめばならぬので、親の貯金で  
 は到底間に合いません。親は近所の店先の鏡箱に手がつく、親の家の家へ忍び込んで、  
 母を捕まるといふことになつて、いよいよ本物の不貞少女に變へ上げられたのであります。か



うなると勿論、世間では黙つて居りません。たちまち警察の手が廻る。幾度か警察に引かれる、その内に捕へに来る逋走の顔を知つてしまつて、私服で追ひかけて来ても、逃早くそれと知つて逃げてしまふといふ手に負へないところまで来てしまつたのであります。そんな按配でありますから、警察では黙へのある毎に苦心して探しては、引つ張つて来て説教をするのですけれども、馬の耳に念仏といふところでありませう。そこで警察でももて餘して、腹に納得させた上で感化院に入れて直してもらふといふ段取りになつたのであります。一番固つたのは、どうして感化院まで連れて行くかといふ問題であります。勿論その娘は、そんな所に絶対に行かないと頑固つて、相變らず覚し廻つて居ります。

そこで警察と親戚の者が協力してその娘を探出し、いよく感化院へ送り込まうといふことになつたのであります。先づ第一にその關門であるところの鑑別所で検査を受けなければなりませんので、そこまで引張つて来るのがなか／＼の難問題であります。私服逋走一人と親戚が二人、途中逃げられないやうにと三人で護衛しながら、やつとのことで

鑑別所までやつて参りました。直先で、入れ、入らぬで護衛者とその娘との間に、永い間の競合ひがあつて、結局控室まで入りましたが、なか／＼検査を受けようとしません。そこで私は逋走と親戚の人々とししばらく退場してもらつて、その不良少女と二人きりになつて、私の真心こめた話を聴いて参りました。さうしたら、今まで絶對沈黙を守つてゐたその少女が、私の誠意に感じてか、突然検査を受けるといふことを云ひ出したのであります。それから、いよくの心理的検査を私一人ですつとやり続けましたが、終まで神妙に受けました。その結果は、さすがに女學校二年まで行つてゐる少女だけあつて、各方面とも、昔相當に養育してゐるのであります。そこで私はこれならば、感化院に入れても充分感化の見込みがあるといふ判断を下して、いよく感化院に送ることに決定いたしました。ところが、それから又一苦勞で、鑑別所から感化院までは、人家のない山道を二十分餘りも引込まなければならぬのでありますから、若し途中で逃げられたら困るといふ護衛者の心配が出て来たのであります。そこで私は、感化院といふ所は、普通の學校と同じ所



で、精神科の病室に隔離されてゐるわけには、垣根さへもかいてない最も開放的な所なんだから、途中で逃げさる位の者なら、入陸してからだつて何時でも出られるので、そんな者は入れたつてしまふがよいのだから、隔離はその子が入る氣持はなるかどうかといふことであるといふことをよく医務長に話してきかせて、それから私がその不良少女と二人きりでしほらぐしんかきと話しました。彼女はつひに泣き出しました。私の眼はも何故かしら涙が溜つてゐました。彼女はその瞬間からすっかり別人になつたのであります。私はその純な氣持に立脚つてくれた少女を、精神的な目で送り届はせようとする調査は手渡しするには遅ひなかつたので、私自身出かかて行くことにいたしました。院長自ら送り届けるなんといふことは、それ以前にも、それ以後にもないことでもあります。それ程私は、この少女の誠心に感動させられたのであります。運命も縁起の人も非常に心配しましたけれど、私は責任を持つからといふことばして、その運命を願ひ、縁起三人に附添つてもらつて、山道と山道の道も届ける道を歩き、私は彼女にいふ、願ひして聞かせました。彼女

は心から感謝しながら、感化院に行くことを喜んでくれました。ほんとうに感化院に入る暇さんのやうないぢらしよでした。裏庭の人々も、非常に安心するともどもに餘りに急激な變り方に感動して居りました。

翌くる日、私が研究資料の調査の爲に、感化院に出かける機会がありましたので、感化院の女生徒と話ねて見ました。そしてそこに、皆と同じ感化院を着て甲斐々々しく働いてゐる彼女の姿を見出した時、私は彼女の爲に涙を流せよと居られませんでした。

けれども、理解のない家庭はやつぱり感目でした。それから二三日の間、私は研究の方が悔しい爲に、すっかり彼女のことを忘れて居りましたが、その後實驗の爲に感化院を訪ねた時にはもはや彼女の姿は、そこに見えませんでした。聞けば、彼女の母親が、定めし不自由な生活をしてゐることだらうと、不憫に思ふところから、盲目的な母性愛にひかされて、彼女を引取りに来たのださうであります。かうして折角發心しかけた純な乙女心を、理解のない愚かな母親は、再び感化院の生活に送つて行くたのであります。



やつぱり不良少女を生ひやうな家庭には、それを教ふ道に對する理解さへも、持合せないもの、やうに思はれます。

### 三 聾啞兒の心理と家庭教育

聾啞 耳が聞えない爲に言葉を使へないところの不幸な子供を聾啞兒となづけるのでありますが、近頃では耳が聞えなくとも言葉を使へるやうに教育する方法が非常に發達した爲に、聾であるけれども聴いてないところの子供即ち聾兒が澤山現れるやうになりました。

聾兒の心の特色に関する心理學的研究は極めて新しいものでありまして、我が國では、大正十四年の春始めて東京の聾啞學校に、聾兒心理學研究室が設けられて、私がその初代の研究主任としてこの方面の研究の開拓に手を下したのが、そも／＼の始まりでありますから、まだ／＼研究の日が浅く、これからといふところでもあります。私が今まで研究いたしました内容の各般にわたつてお話しするといふことは、この小著では到底望まれな

とでありますから、その中の主なるもの二三について、家庭教育といふ立場から、極く簡単に話することにいたします。

先づ聾兒の特色といひますと、何といつても耳が聞えないといふことでありますから、その聞えないといふことが果して絶體的なものかどうかといふことについて一通り心得ておく必要があります。音を聴く力即ち聴力といふものは、普通の人でも、非常に鋭い人から、普通の者と通つて、非常に鈍い人即ち耳の遠い人に至るまで、いろ／＼の程度の差があるものであります。聾兒の場合も同様でありまして、普通の人の中で、最も耳の遠い人のその又次に遠い者に當るところが、丁度聾兒の中の一番聴力の鋭い者に當るといつたやうな關係になりました。その上更に又聴力の鈍い聾兒があるといふやうにして、順にその聞えない程度といふものが甚だしくなつて參ります。

私がかつて、非常に精密な聴力計を用ひて、二百餘人の聾兒の聴力検査を行つた時の結果によりますと、その器械でも尙且つ聞えないといふ聾兒は、全體の約三十三パーセント







の心の働き、即ち、抽象的な智能の働きを必要とするものでありますから、生れつきの甚だしく劣つてゐる聾兒は、到底口話で成功させることが覺えないことと思ひます。従つてさういふ子供等は結局手話即ち手眞似法に歸つてしまふのも仕方がないことと思ひます。普通の子供でも、甚だしい低能兒になると、どんなに苦心して教へても、言葉の發達が思ふやうに行かないといふことがしばしば起るのでありますから、聾で然も低能兒である場合には、むしろ骨折損をするよりも、初めから容易な、具體的な手眞似法で導いた方が、効果があるかも知れません。そしてその口話に使ふだけのその子の勢力を、技術的作業の學習なり練習なりに向ける方がかへつて望ましいことかも知れません。

これに反して智能の優秀な聾兒は勿論、普通の者でも、抽象的な言葉を習得する能力のある聾兒に對しては、出来るだけ早く、口話を教へなければなりません。早ければ早い程効果があるわけでありませう。聾學校に出すやうな年齢になつてからでは、手眞似の方を先に覺えてしまつて、口話の教へ方に對してさういふ邪魔になることが多いのであります。

**智能** 聾兒に言葉を教へるにしても、その他の學科を教へるにしても、先づ考へなければならぬことは、その智能であります。盲人には填保己一のやうな偉い學者も出て居りますので、昔から盲人は普通人と同じやうな賢さをもつて居るものと見られて來て居りますけれども、聾人には昔から秀でた人物が出てゐない爲に、むしろ低能なものと思はれ、聾兒の教育に當る人々の間にさへ、從來しばしば聾兒者は低能であるとの公言を聞くやうな有様でありました。

然るに最近になつて、私が聾兒の智能を檢查するところの標準の検査法を作つて、これを聾兒に適用してみましたところ、決してさやうな低能者ばかりではなく、なか／＼優秀な智能をもつてゐる子供もあることが發見されました。全體として見ては、普通の子供よりやや劣りますけれども、優れた者と劣つたものとが比較的少なく、普通に近いものが最も多いといふ傾向なども、普通兒聾兒兩場合ともに同じことであります。殊に前に述べました技術的習能においては、普通の子供との差極めて少なく、今後の聾兒の活動の天地



が、そこに約束されてゐるのでありますから、家庭も學校も、技術的教育に於て一段の工夫と努力とを要されることを切望して止まないものであります。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な印刷文字が並ぶ）

昭和七年十一月五日第一版發行  
昭和八年一月二十日訂正再版發行  
昭和八年一月二十五日第三版發行  
昭和八年二月一日第四版發行  
昭和八年二月十日第五版發行

昭和八年二月二十日第六版發行  
昭和九年五月五日改訂第七版印刷  
昭和九年五月十日改訂第七版發行

【定價壹圓五拾錢】

版 權 所 有

5.9

著 者 石 川 七 五 三 二

東京市板橋區下石神井二丁目一三三九番地

印 刷 者 加 藤 晴 吉

東京市本郷區湯島切通坂町五一番地

印 刷 所 會 社 正 文 舍 第 一 工 場

東京市本郷區湯島切通坂町五一番地

發 行 所

東京市板橋區石神井非公團

東京教育研究所

〔發售東京七八一二三番〕



東京教育研究所長 石川七五三二一著

# 家庭で出来る心の検査尺度

「児童の心理と家庭教育講話」改訂版の姉妹篇、家庭で出来る簡易な精神検査法の實際的指導書。

東京教育研究所長 文部省 石川七五三二一著

### 〔内容〕

第一章 はしがき、第二章 幼児検査尺度検査法、第三章 幼児言葉発達検査法、第四章 幼児智能検査法、第五章 興味型検査法。

四六版六〇頁  
検査用附圖五枚附  
定價五拾圓

## A式團體智能検査法

尋常二年以上の児童及青年の智能を最も確實に検査し得る標準付検査法。「検査施行要領」に検査の方法、採點法等詳述。家庭又は學校に於て同時に幾人でも検査し得る實際的科學的検査法。

### 検査施行要領

一部三十頁

### 検査用紙

一部四拾頁

### 發行所

東京市板橋區 石神井公園 東京教育研究所

〔電話東京七八一二三番〕







